

窓の外、白んだ空で小鳥が鳴く。それで、ユユは目を覚ました。

いつ眠ったのかは覚えていなかったが、どうやら朝が来たようだった。部屋に薄い朝日がさし込んで、床の絨毯(じゆうたん)をあわい色に変えている。

ユユは天蓋(てんがい)付きの豪奢(ごうしゃ)な寝台からおりて、うんと伸びをした。一緒に寝ていた人形を寝具の中から引っ張り出し、話しかける。

「おはよう、今日もいいお天気ね」

人形のサナがにこにここと笑う。

『おはようユユ、今日もいっぱい遊ぼうね』

自分で自分に返事をするのも、そろそろ飽きてしまった。

かといって振り返っても、そこにあるのはいつもの光景だけだ。ユユと世界とを隔てた固い格子。すき間から手を伸ばしても届かないほど遠くに、二人の大人がユユに背を向けて立っている。夜の間に交代したらしく、昨晚とはちがう人だった。ずっとここで過ごすうちに、ユユは背中を見るだけで、揃いの服を着た大人たちを見分けられるようになっていた。

「おはよう、おじさんたち！」

ユユは軽やかに挨拶をした。名前を知らないので、こう呼びかけるしかない。

大人たちは返事どころか身じろぎもしない。それもいつものことだった。

ユユの住んでいる部屋は、駆け回れるほどに広い。その片すみに、石造りの机が一つと、椅子が二つ、置かれている。ユユと、その友達が座るためだ。

ユユは椅子の片方に人形を座らせて、自分は向かいの椅子に座った。人形の首がかくんと垂れてしまうのを、手を伸ばして戻そうとするが、うまくいかない。しばらく奮闘したあと、ユユはあきらめて手を離れた。

机の上の皿には、食べ物がのせられている。毎日、ユユが眠っている間に誰かが置いてくれているらしい。

土のついた細長い野菜を口に放り込む。味を感じる間もなく、溶けるようになってしまった。

「お野菜をたくさん食べるとね、風邪を引かないんだよ」

ユユは残っていた野菜を人形の口に押しつけた。土がぼろぼろと人形の服に落ちる。けれど人形はすでに真っ黒だったので、あまり関係はなかった。

ひとしきり人形に野菜をこすりつけると、ユユは果物にとりかかった。果物はぐちゃぐちゃと柔らかく、手掴みで食べるのは難しい。さらに周りにたかった虫が邪魔だった。

皿をかたむけて、果物を直接口の中にすべり込ませる。すると、うるさい虫の羽音も聞こえなくなった。果物の甘い匂いに誘われて虫が来るのは知っていたので、人形に食べさせることはしない。前の人形にそれをしてひどいことになったのを、ユユは覚えていた。

皿を持ったまま、ユユはうっとりとして見とれる。金色の模様で縁どられた、きれいな皿だ。ほしいほしいと大人たちになだり続けていたら、ある日机の上に置かれていた。

『ねえ、早く遊ぼうよ』

人形が首をかたむけたまま言う。

屋になると、大人の交代の時間がやってくる。ユユが起きている間では唯一の変化だから、楽しみな時間だった。

しかもその日は、いつもと様子がちがった。

見たことのない顔が歩いてくる。若い男で、いつも来る年配の大人に連れられている。彼は新入りなのだ。

新鮮だった。ここの顔ぶれが変わるのは久しぶりだったからだ。

新人の男は格子の前まで近づいてくると、おそろおそろといった様子で顔を上げた。それを、ユユは興味津々で見つめる。

しかし目が合った瞬間、男はすぐに顔をそむけてしまった。その表情が恐怖にゆがむのを、ユユは見のがさない。

ここに最初に来る人はみんなそう。ユユを見ると、怖がって目をそらしてしまう。初めは向こうに何かが見えているのかと思ったけれど、どうやら単にユユに怯えているだけのようなのだ。怖くないよ、という意味をこめて、ユユは両腕を大きく広げる。

「こんにちは。お兄さんは、新しい人なのね？」

話しかけると、男はびくりと肩をふるわせた。そうした反応が返ってくることで自分が久しぶりで、ユユはうれしかった。ここに慣れた大人たちは、ユユが何をしても無視をするから。

「ね、ユユはね、ユユっていうの！ このお友達はサナ。あなたはなんていう名前？」

ユユは格子の向こうに向かって、人形を揺らしてみせる。

しかし、男は顔を引きつらせただけで、何も言おうとはしなかった。ユユはがっかりする。

「ねえ、ねえ」

「あ、あの……」

「馬鹿、話すな！」

男が口を開いたとたんに、その後ろにいた仲間が声を上げた。余計なことを言わないで、とユユはその大人をにらむ。あいつさえいなければ、話ができたかもしれないのに。

そうユユが思った瞬間、格子がガタガタと鳴った。大人たちの間に緊張が走る。

怖がらせたかもしれない。昔、誰かが言っていた。自分が優しくしていれば相手も優しくしてくれる、と。ユユはなんとか気持ちを落ち着かせて、甘い声を作った。

「ねえお願い、誰かユユとお話してよ。ユユの名前を呼んで。そしたらユユ、何だってしてあげる！」

しかしもう誰も、何も答えてくれなかった。ユユは格子をつかんで、少しでも大人たちに近づこうとする。けれど、大人たちはユユから遠ざかっていく。格子に触れた手が痛かった。

「ねえ、名前を呼んで……」

むだだとは悟っていても、言わずにはいられなかった。ユユはもう長いこと、誰にも名前を呼ばれていない。そのことが、無性に悲しいのだった。ここで暮らし始めてからずっと、ユユは誰かに名前を呼んでもらうことを夢見ている。

でも、それだけではなかった。

さびしい。さびしい。さびしい。

「誰か、こっちに来てよお……」

一人なのはもう嫌だった。一人で起きて、一人で話して、一人で泣くのは嫌だった。けれど泣いても泣いても、誰も振り向いてはくれない。なぐさめてはくれない。そうして毎日、泣き疲れて眠ってしまうのだ。そのことを大人たちも知っているはずなのに、決して助けてはくれないのだった。

変わらない日常。いつからここにいるのかも覚えていない。でも、たまに夢に見るおぼろげな記憶の中でだって、ユユは満たされてはいなかった。生まれたときからずっと、さびしさに支配されている。

はるかな昔、人間が何の力も持たなかった頃。のちにグランゼリアと呼ばれることになるその土地は、まだ荒れ果てた野山でしかなく、魔界と人界の重なる魔境として知られていた。

その魔境のいちばん深いところに、花園があった。

二つの世界が混じりあい、境界線がぼやけて消えた場所。そこに棲(す)むものは何もなく、ただ花だけが咲き乱れている。

色とりどりの美しい花々。ほのかな光を宿した花びらは、あるときはつめたい泉の底の色へ、あるときは空にたなびく夕やけ雲の色へと気まぐれに移ろい、決して色あせることがない。ある一輪が消え、ある一輪が再びあらわれることも、珍しいことではなかった。

あらゆるものはひとつの輪の中にあり、はじまりも終わりも大きな意味を持たない。すべては変わりゆき、定まらないまたゆたう。魔界から生まれいずるものの、それが掟だった。

最初に悪魔と話をした人間は、たった一人、国を追われた青年だった。

魔境には悪魔が棲(す)んでいる。そのことを、青年は幼い頃から幾度も聞かされて知っていた。人間にはない力を持った、異形の化け物。近づいた人間をたちまち食ってしまう悪魔の話には、大人たちでさえ顔をしかめる。

それがただの噂として月日とともに流れていかなかったのは、悪魔が本当に存在したからだった。魔境のそばを通った者はみな口々に語る。家よりも大きい巨軀(きよく)の化け物を見た、ずるずると死体を引きずる音を聞いた、と。

事実、魔境には悪魔がいた。姿かたちは人間や他の動物とは似ても似つかず、生態も大きく異なる。何百年もの歳月を生き、死んでは魔界に還って再び生まれ変わる、流転の生き物。悪魔のほかにもその荒れ野に棲んでいるのは少数の獣だけだった。

そんな悪魔は、けれど外見とは裏腹に、気性の穏やかな心優しい生き物だった。しかし人間たちはそれを知らず、怯えて暮らしていた。

そこにあるとき、一人の青年が足を踏み入れる。そして、悪魔の王に出会った。

悪魔の王はおどろいた。そして訊ねた。

「どうして人間がここに来た？」

「僕は人間だ。でも、人間のおろかしさを知っている」

そう答えた青年は、すでに死にかけていた。傷口に塗る薬はおろか、飲み水の一滴さえ、彼は持っていなかった。

悪魔たちは青年を助けることに決めた。悪魔は不思議な力を使って、青年のために水を清め、火を起こして料理を作った。

それから青年は、悪魔と仲良くなった。青年は悪魔の醜悪な姿も不気味な力も恐れなかった。まるで家族のように暮らしながら、人間の世界の生きづらさをぼつぼつと語った。

ある日、青年は言った。

「僕と、僕の愛する人々とを、ここに置いてくれないか。僕たちには行くところがない」

悪魔たちは、よろこんでそれを迎えた。不安がる声もないではなかったが、青年が善良な人間であることは、どの悪魔も否定することができなかった。

「どうか信じてほしいんだ。僕たちは共に暮らせるということを」

そうして、最初の約束が交わされた。

魔術師の国グランゼリア。かつて悪魔の国と呼ばれたその小さな国土には、いくつか巨大な塔が建てられていた。凶魔(きょうま)——悪魔の中でも特に凶悪なものを封じるために作られたおりである。

「ギルベルト、本当に行くの？」

リーオがそう訊ねてきたのは、塔の入り口に着いたときだった。

ギルベルトはリーオを振り返った。着ている服だけは上等な、小柄な少年が立っている。肌は青白く、髪は手入れされていないのであちこち跳ねていた。ろくに切っていない前髪の奥で、翠(みどり)の瞳が不安げにまばたきをする。ひ弱そうな体軀のせいもあってか、弱った羊のように見えた。

そんなリーオの様子を、リュビアが心配そうに見つめている。リュビアは今も少女の姿をしているが、その本性は高位の悪魔である。分厚い外套(がいとう)の裾から青の花びらがちらちらと舞い落ちて、地面に溶けるように消えていく。その身におさまりぎらない魔力が、幻(げん)花(か)となってもれ出しているのだった。

配下の悪魔にまで頼りなく見えているのか、とギルベルトは心中でため息をついた。

それからリーオを元気づけるように、笑みを浮かべてみせる。

「もちろん、そのために来たんだからな。それに——お前が守ってくれるんだろう？」

リーオは視線を上げてギルベルトを見た。それから、安堵したようにふっと笑みをこぼす。ぼさぼさの銀髪が、陽光を受けてあわく光る。

「まあ、ギルベルトが死んじゃったら僕、行くところなくなっちゃうし」

「なら大丈夫だな。俺は死なない。頼りにしてるぞ」

ギルベルトが快活に笑うと、リーオはまんざらでもない様子で口角を上げた。その表情からは、怯えがいくらか消えている。

リーオが怖気づくにはわけがある。

緋(ひ)焔(えん)の暴魔、アサーディール。それはこの塔に封印されている、五百年以上前に生まれた一体の悪魔の名前だ。数々の伝説の中に登場し、グランゼリアでは広く知られている。

——破滅を呼ぶ、最悪の凶魔として。

グランゼリアで特に人間に災厄をもたらした悪魔は、凶魔と呼ばれ各地の塔に封じられる。アサーディールも、その中の一体だった。

その悪魔が誕生したのは、五百年以上前のことだったという。当時グランゼリアでも一、二を争う魔術の名家だった侯爵家が、あるとき一夜にして消滅した。立派な邸宅も美しい庭もすべてが炎の中に消え去り、灰燼(かいじん)と化した。その日はちょうど侯爵家の長女の五歳の誕生日で、多くの貴族が屋敷に集っていたが、生きて帰った者はなかった。

よく晴れた朝、食材を届けにやってきた町の人間が見たのは、黒く燃えつきた建物の残骸と、その中心にうずくまった赤い悪魔の姿だった。

ここまでは、よくある話である。ある日突然人間が悪魔と化し、大災害をもたらす。それはグランゼリアという魔境で暮らす限り、避けることのできない悲劇だった。

魔界から湧き出した魔力は、やがて悪魔の魂となり人界の生き物に宿る。悪魔はその生き物の体と心とをすっかり奪って、自分のものとしてしまう。それゆえに、悪魔は忌み嫌われているのだった。

しかし、通常であれば、誕生したときにどれだけ暴れようと、悪魔は人間との「約束」に縛られ、服従する運命にある。アサーディールは普通の悪魔ではなかった。その悪魔が侯爵家を滅ぼしたあと、残された人間は悲しみながらも、その悪魔を従えようとした。

アサーディールは並々ならぬ力を持っており、その主には国一番の魔術師が適任とされた。しかしその魔術師は、悪魔を従えたその日に死んだ。次の魔術師は、三日目に死んだ。多くの魔術師が挑んだが、誰もアサーディールを服従させることはできなかった。

悪魔が魔術師を殺し、なお生きながらえるなどということは、それまではありえないことだった。悪魔の強大すぎる力と、多くの魔術師が殺されたという事実、人々は戦慄(せんりつ)した。幸いだったのは唯一、その悪魔に聖花による封印が有効だったことだ。そうしてアサーディールは凶魔として塔の中に封じられ、今に至るのである。

そうした経緯を、ギルベルトはもちろん知っていた。いちおうは貴族の血筋であるギルベルトにとって、悪魔の主殺しは他人事ではない。だから高名な魔術師の家に生まれたリーオが怖がる理由もよくわかる。

けれどそれでも、ギルベルトは行かなければならないと思ったのだ。仲間はまだほとんど死んでしまって、ギルベルトのそばに残ったのはリーオだけだった。ギルベルトがそれまで使役していた悪魔も、あつけなく殺された。ギルベルト本人が無事だったのは、奇跡みたいなものだ。

ならばこれは運命なのだ、とギルベルトは思う。自分が生き残ったことには意味がある。復讐のために——この国の貴族たちを潰すために、より強大な力を手にしなければならない。そうでなければ、自分は生きてはいけなような気がした。だから今日、ここに来た。

見上げた塔はいかにも堅牢(けんろう)で、古びた扉には貫禄さを感じられる。ひらりと一枚、聖花の紫の花びらがギルベルトの頬にはりついた。

怒号はやがて悲鳴と、逃げ惑う足音に変わる。

ざあざあと雨が打ちつける。塔の中は嵐だった。黒々とした雲が視界を覆い、床にあふれた水が足をすくう。そうして塔に混乱を呼び込んでいるのが、リュビアの魔法だった。全身に雨をかぶりながらも、ギルベルトはただ最上階を目指して階段を上る。

そして、そのときは訪れた。

おりの前にたどり着いたギルベルトは、はっと息を呑んだ。そのまま一瞬、時を忘れて立ちつくす。

格子の向こうは、異臭がたちこめる汚い部屋だった。中央に見えるのは寝台らしき骨組み。寝具は耐火の素材らしく原形を保っているが、うす汚れて雑巾のようには見えぬ。床には布が敷かれていたが、これも焼け焦げてほとんど灰になっている。

そこに、悪魔がいた。

目玉は一つ。口は三つ。背はギルベルトの倍はある。子供がでたらめに作った泥山のような形の体は真っ赤に熟した果実の色をして、液体のようにてらてらと光っている。

悪魔はおりの中にいる間ひどい苦痛をおぼえるらしいが、目の前のそれに苦しそうな様子はかけらも見られない。

化け物は一つ目をぎよろりと動かした。その巨大な黒い瞳に、ギルベルトの姿が映る。その目はつめたく、何の感情も宿していないように見えた。

これが、とギルベルトは心の中でつぶやく。

ユユ・アサーディール。魔術師殺しの、狂った凶魔。

* * *

そのときまで、その日はいつも通りだった。人形と話し、味のしないご飯を食べ、大人は返事をくれなかった。

ユユが非日常に気づいたのは、遠くから聞き慣れない足音がしたときだ。

いつも大人が歩くときよりずっと速く、力強い音。

(走ってるんだ……)

ユユはぼんやり考えて、それから目を瞬いた。その駆ける音が、どんどん大きくなっていることに気がついたからだ。

格子の向こうが、にわかに騒がしくなる。大人たちが慌てふためくのが見えた。ユユは胸が高鳴るのを感じた。ユユが覚えている限り、こんなことは初めてだったからだ。

人形を放り出し、手がひりひり痛むのもかまわずに、格子を握りしめる。

「ねえ、どうしたの？ 誰が来るの？」

大声で呼びかける。返事はなかった。誰も返事をする余裕がないようだった。

足音はどんどん近づいてくる。やがて通路の先に、その姿が見えた。

若い大人だった。以前やってきた新入りよりも、さらに若い男。なぜか頭からつま先までずぶ濡れで、少し寒そうにしている。赤毛がぴったりと顔にはりついていてた。

男はまっすぐに、ユユの方に向かって歩いてくる。そして格子の前まで来ると、立ちどまったまま動かなくなった。

考えごとでもしているのか、男はしばらく何も言わなかった。ユユを見つめる瞳は真夏の太陽の色をして、きらきりと光って見える。

「ユユ・アサーディール」

低い声が、ユユの名を呼んだ。

生まれてはじめて名前を呼ばれた気がした。よろこびで、体の表面がぼこぼこことあわ立つのがわかる。二つめの口から流れ出た炎が、虹色にゆらめいた。

「なあに？」

ユユの甲高い声に、男はおどろいたように目をみはった。それから、大きく深呼吸をする。ユユもつられて、深く息をついた。

窓から光がさしてきて、ユユの影が男を覆う。影は小さな山のような形をしていた。

「俺はギルベルト・オルディアン」

「ギルベルト・オルディアン」

ユユは復唱した。なんとなく、そうしなければならぬ気がしたからだ。

男はにっと笑った。その笑みに、ユユは見とれた。ユユに笑いかけてくれた人など、これまでいなかった。この人が、自分を助けてくれるのだと思った。

ユユに笑みを向けてくれた男は、その表情のまま、宣言するように高らかに言う。

「約束してほしい。——俺を、信じてくれ」

「信じる」という言葉の意味を、ユユは知らなかった。けれどそれでも、うなずいてみせる。

それは何か素敵なことの、はじまりのように思えたので。

「うん！」

応えた瞬間、世界が真っ赤にかがやいた。その鮮烈な色が、ぎゅうぎゅうと体じゅうに詰め込まれていく。床に落ちた影が、みるみるうちに小さくなる。格子がばらばらに崩れて、ただの木の枝に戻った。

待ちわびた日。体を動かしてみると、ぼやけた視界に小さな人間の手のひらが映る。それで、ユユはそれまで自分が怪物の姿をしていたことを思い出した。だから誰も相手をしてくれなかったのだ。

けれど、いまやユユは目の前に立つ男を見上げている。小さな肉体に押し込められた窮屈さよりも、歓喜の方がずっとずっと強い。

誰かが名前を呼んでくれた。それだけで、これまでのひとりぼっちのさびしさが、すべて消えていくようだった。

百年分のしあわせを集めたらきっとこんなふうだろうと、ユユは思った。

魔境はやがて町になり、国になった。グランゼリアには二人の王が並び立った。人間の王と、悪魔の王。人間と悪魔は固い絆で結ばれ、二つの種族は共生していた。

しかしその平和は、あるとき打ち破られることになる。

当時、グランゼリアには王子が一人いた。その王子は国王のただ一人の息子で、大切に育てられていた。国に住む人間からも悪魔からも愛される、利発で優しい少年だった。

その王子が、悪魔になった。魔界からあふれた魔力の宿る先は、誰にも——悪魔の王にさえも、選ぶことができない。王子だった少年は異形の魔物と化し、その場にいた多くの城の人間が命を落とした。

かろうじて生き残った人間の王はたいそう悲しみ、心を壊し、やがて悪魔を憎むようになった。悪魔の王を責め立て、人間の悲運を嘆いた。

悪魔に体を奪われるのが人間の悲運ならば、悪魔の悲運は、変わりうる生き物であることだった。悪魔の王が火とえば、すべての悪魔は火になる。悪魔の王が水とえば、すべての悪魔は水になる。悪魔という生き物の性質さえも変えうる力を、悪魔の王は持っていた。

心優しい悪魔の王は、だから大きな決断をした。人間への慰めと償いの証として、自身を含むあらゆる悪魔のあり方を変えることにしたのだ。そうして悪魔は聖花に弱く、約束に束縛される生き物になった。

それがこの約束の国の、長い長い退廃の始まりだった。

「まったくおどろいた。私がお前たちを引き取ったのは、こんなことのためではないというのに」

机をはさんでリーオの向かいに座った女が苦言を呈した。短い金髪に灰色の瞳の、妙齢の女。凶魔の塔を含む周辺地域の領主、イルマ・フォンテ伯爵である。北方の有翼種の血を引いているため、リーオよりも頭一つ分以上背が高い。

イルマは色白の端正な顔に苦い表情を浮かべる。

「お前たちが友人の子でなかったら、即座に放逐(ほうちく)しているところだよ」

「申し訳ないとは思ってるよ、伯爵」

リーオが言うと、イルマはため息をついた。

グランゼリアは今、不安定な状態にある。長きにわたって、この国は国王を擁する貴族に支配されてきた。平民の不満の声はことごとく潰され、王族や貴族に都合の悪いことはなかったことにされた。

それが可能だったのは、悪魔を使役できるのが貴族だけだからだ。

グランゼリアはもともと悪魔の土地だった。魔界からあふれ出した魂がほかの生物に宿ると、悪魔という生き物になる。悪魔は強大な魔法を使うことができた。

悪魔は自身の持つ魔力を周囲にあふれさせている。それを見ることができるとも、悪魔を「約束」で縛り付けることができるのも、貴族の血筋の者だけ。結果、貴族は大きな力を持つようになり、平民はなすすべもなく支配されるようになったのだった。

その関係に、綻(ほころ)びが見え始めている。より強い悪魔を従える王族の地位が高まるにつれて、貴族の中にも格差が生じるようになった。かつて一枚岩だった貴族たちの中に離反する者が現れ、平民を巻き込んで反国王派の革命軍を作り上げるに至った。やがて有力な貴族の一部も革命軍に味方するようになり、国は二つに分裂した。

その中で、凶魔は抑止力として重要な意味を持つ。凶魔と称され塔に封じられている悪魔のほとんどは、人間の手に負えない厄介な性格をしている。しかしひとたび制御できれば、情勢を容易くひっくり返すことのできる存在でもあった。

そのうちの一体を、ギルベルトが独断でおりから出してしまったのである。アサーディールの塔はイルマの領地の中でも敵地からかなり離れた山際にあり、警備が手薄だったことも、リーオたちにとっては幸いだった。

「お前たちは事の重大さを理解していない。なぜこんな余計なことをしたんだ？」

リーオは視線をそらす。はじめから理解する気のない相手と話すのは苦痛で仕方がない。リーオにしてみれば、持っているだけの力など、持っていないのと同じだった。イルマが「牽制(けんせい)」や「前哨(ぜんしょう)戦」と呼ぶ小規模な争いの中で、リーオたちの仲間は死んだのだ。使える力があるのなら使うべきだ、というギルベルトの意見に、リーオも賛成だった。

「僕は、ギルについていっただけだよ」

イルマは何度目かわからないため息をついた。

「リーオはもう十二だろう。もっと自分の意志を持ちなさい。悪魔なんかと話していないで、国のために何ができるのか考えるべきだ」

「わかっている。それ、何度も聞いたし」

耳をふさいでしまいたい気分だった。イルマが恩人であることはまちがいない。彼女が後見人としてギルベルトとリーオを助けなければ、二人は最悪の場合死んでいた。しかし、そのこととイルマと思想が一致するかどうかは別問題である。

リーオの態度に、イルマは呆れた表情になった。頑なな子供だと思われているのがよくわかる。それでも、リーオはかまわなかった。リーオはイルマではないし、イルマはリーオではないからだ。リーオが信じて従う相手は、ギルベルトのほかにはいない。

「……上に知らせる？」

「いや、しばらくは伏せておく。他言無用だ。ヴェーノもわかったな」

はい、とイルマの後ろに控えた男がうなずいた。イルマと約束を結んだ悪魔である。

「ところで、今その悪魔は？ まだ眠っているのか？」

「ギルが様子を見てるけど、たぶん、まだ」

リーオとリュビアが部屋に入ってきたとき、ギルベルトはまだユユが起きるのを待っていた。

「まだ起きないの？ 起こしたら？」

「起こしたんだが起きなかった」

ギルベルトはため息をつく。声をかけてもぴくりともせず、揺り動かしても寝返りを打つだけだった。

やわらかな寝具の中で寝息をたてている悪魔。巨躯の怪物は、今は小さな女の子の姿をしている。

塔ではじめて声を聞いたとき、ギルベルトはおどろいた。声の高さもしゃべり方も、まるで幼い子供のようなからだ。とても、五百年以上も前に生まれた悪魔とは思えなかった。

寝具の白に時折、赤い花びらがにじみ出しては消えていく。それが、ユユが悪魔であることの証だった。人間の姿になった悪魔は、あふれ出る魔力を花に変える。赤い悪魔のまとっていた炎が、今は真っ赤な幻花となってあらわれているのだ。

「フォンテ伯爵はどうだった」

「案の定、怒ってたよ。いちおう、しばらくは静観してくれるみたいだけど」

伯爵の名前を出すと、リーオがあからさまに嫌そうな顔をする。どんな雰囲気の話だったのか、それだけで察せられた。

「ご苦労だったな」

「本当に。……僕、ああいう人は苦手だよ。もっと自分の意志を持って言うけど、それはあの人や国にとって都合のいい意志のことなんだ」

ぶつくさ文句を述べ始めるリーオに、ギルベルトは釘を刺しておく。

「俺も、悪魔に入れ込むのはよくないと思うけどな」

リュビアが居心地悪そうに身じろぎする。

リーオが自分の悪魔であるリュビアに対して複雑な、やや屈折した感情を持っていることを、ギルベルトは知っていた。それは、元をたどればリーオが今の場所にいる理由でもある。ただギルベルトには、イルマのように説教をする気はなかった。

「だが、お前は俺じゃない。好きにすればいいさ」

それがギルベルトの性分だった。人にはそれぞれ事情があり、考えがある。自分の邪魔さえしなければ、隣人がどんな変わり者でも別段気にならなかった。たとえ、リーオが異端者であっても。

悪魔は穢(けが)れた存在だから、話してはいけない。人間は常に悪魔の上に立つ存在でなければならない。それが悪魔を従える者の大多数の意見である。しかしリーオは、悪魔のリュビアと頻りに言葉を交わし、人間同士であるかのように接している。それが、リーオが異端と呼ばれ、貴族の地位を剥奪されたゆえんだった。リーオ——リーオ・エトワールは、本来こんなところにいるいい人間ではない。彼とその双子の姉ルーアは、名門エトワール家の長男長女として大切に育てられ、将来を期待されてきた存在なのだ。

「お前はよくやってくれたよ。もう寝ていいぞ」

僕はまだいい、とリーオは首をふった。

「ギルこそ寝てないだろ。休んだらどう？」

そうだな、とギルベルトはつぶやく。いったん眠気を意識すると、自然とあくびが出た。

そうして立ち上がった瞬間、部屋の中にぱっと花びらが舞った。場に緊張が走った。寝ている場合ではない。

それは、あの悪魔がまとっていた炎と同じ赤色をしている。ギルベルトは寝台をのぞき込んだ。

幼い少女が、いつのまにか目を開けていた。夜空を閉じ込めたような黒い瞳が、きよろきよろと動く。白い寝具の中で、小さな手が何かを探しているようだった。

しかしその動きも、ギルベルトを見つけたとたんに止まった。目が合うと、少女は何度かまばたきを繰り返して、それからばあっと笑顔になった。

「おはよう！」

きらきらした目で、ギルベルトを見つめている。

「ねえねえ、ここはどこ？ 新しいおうち？」

少女はすくと寝台から飛びおりた。長い黒髪がさらさらと流れる。すると少女は動きを止めて、おどろいたように自分の足と、髪とを眺めた。人間の姿であることを確かめるように、髪をすくって引っ張ったり、頬に当てたりする。

ひとしきり人間であることを確認すると、少女は部屋の中を見回した。イルマから与えられた一室で、壁には絵画や造花がかざられている。

ユウが目をかがやかせて花に手を伸ばしたので、ギルベルトはあわててその手首をつかんだ。どれも高名な画家や作家のもので、おいそれと入手できるものではない。

「触るな。お前が触れていいものじゃない」

言いながら壁を見やって、ギルベルトは気がついた。造花の束の中に、摘んだばかりの聖花がまぎれ込んでいる。悪魔は化け物の姿では、聖花のそばを通ることができない。それがここにあるということは、この部屋全体——屋敷全体に、聖花が仕込まれているのだ。たとえ凶魔が暴走を起しても、逃げられぬように。

聖花は紫色の小さな花で、グランゼリア国内では決して育つことがない。国外から摘んだばかりのものを運ばせる必要があるのだ、それ自体が貴重なものだった。

これを取ろうとしたのか、とギルベルトは目を細めた。容姿にだまされてはいけない。無邪気にふるまっているも、裏では人間の手をのがれる算段を立てている。相手は五百年以上も生き、多くの人間を殺してきた凶魔なのだから。

「ユウ・アサーディール。俺がお前の、新しい主(あるじ)だ」

「あるじ？」

ユウはきょとんとして首をかしげた。言葉の意味がわからないとでも言いたげに、じっとギルベルトの目を見つめる。

そのままユユは、ギルベルトが話すのを待っていた。無言の時間が続くにつれ、その眉尻と口角とが下がっていく。ついには退屈だと言いたげに、体を揺らし始めた。そのことに、ギルベルトはおどろく。これほど感情表現の豊かな悪魔ははじめて見た。

リーオとリュビアが、ちらちらとギルベルトに視線を向ける。そのまましばらく経ってからようやく、ギルベルトはこのままでは話が進まないことを悟った。

「……お前は、俺の言うことを聞かなくてはならないということだ」

なぜこんなことを説明しなければならないのか、とギルベルトは苦々しく思う。今までギルベルトが出会った悪魔はみな、はじめて話したときから人間に服従の意を示していた。

「ユユは、えーと、ギルベルトの言うことを聞かなきゃいけない？」

「そうだ」

「えへへ、なんだかうれしい」

何が楽しいのか、ユユは間の抜けた顔で笑った。ギルベルトは顔をしかめる。

こんな会話をする事自体が無意味だと思った。悪魔はただ人間に従っていればいい。だから、こちらから話しかけてもいないのにしゃべり始めるのが不可解で、不快だった。

「勝手にしゃべるな」

「ねえねえ、ユユがギルベルトの言うことを聞かなきゃいけないってことは……」

悪魔は聞いていなかった。ユユは少しもじもじしながら言う。人間の仕草のまねをして、こちらを油断させようとしているのだ。ギルベルトは身構える。

「ギルベルトが、ユユのお兄ちゃんってこと？」

時が凍りついたような沈黙が流れた。

ギルベルトは思わず、拳を握りしめた。振り上げそうになるのをなんとかこらえる。

「ふざけたことを、言うな」

ほとんど閉じたままの唇からもれ出した声の低さに、ギルベルトは自分でもおどろいた。ユユの顔に、怯えが走る。

「俺は、お前の兄じゃない」

ギルベルトの妹は六歳で死んだ。ギルベルトの目の前で殺された。助けが来るのがあと少し遅ければ、二人とも殺されていただろう。けれどあと少し早ければ、二人とも助かっていた。どちらでもなかったのが、いちばんの不幸だった。

あのときのことを、ギルベルトはずっと覚えている。妹を殺したのは、国王派の貴族だと聞かされた。その貴族たちに復讐するために、ギルベルトと両親は反国王派についたのだ。そしてその両親も、もういない。勝手に死んだ両親のことはどうでもよかったが、死にゆく妹の姿だけは、いつまでも忘れられなかった。

お兄ちゃん、と記憶の中の妹が呼ぶ。その言葉を目の前の悪魔が口にしたことに、どうしようもなく嫌悪をおぼえた。

「俺をそう呼んでいいのは、俺の妹だけだ」

ユユは唇をきゅっと結んだ。

「じゃあ、ユユのお兄ちゃんはどこ？ お父さんは？ お母さんは？」

「死んだ。お前が殺したんだろう」

悪魔は魔術師との「約束」によって、人間の姿に戻る。侯爵家の消滅の日に誕生日を迎えた長女というのが、ユユ・アサーディールの原形なのだろう。

「ユユ、そんなことしてない……」

ユユの表情が、大げさなほどにゆがむ。怒っているようでもあり、悲しんでいるようでもある。

「嘘をつくな。お前が、侯爵家を燃やしたんだ」

悪魔は悲劇を呼ぶ。しかし大半の悪魔は、自分が誕生の際に人間を殺したことを覚えていない。それが、悪魔と人間との間の最初の軋轢(あつれき)であり、悪魔の最初の罪である。

ギルベルトは悪魔の嘘を正したつもりだった。知らないふりをしてこちらの動揺を誘おうとしているのだと思ったからだ。しかしユユは、その場に座り込んだ。

「そんなの、やだ……！」

ユウの声は悲鳴じみていた。みるみるうちに、目のふちに涙がたまっていく。その最初の一滴がこぼれ出すと同時に、赤色が踊りだした。

部屋の中に花びらがわき返る。ギルベルトは一步あとずさったが、むだなことだった。幻花の触れたところに、棘が刺さったような痛みが走る。耳にはユウの泣き声がわんわん響いていた。

「落ち着け、ユウ・アサーディール！」

ギルベルトは言いながら、自分自身も落ち着いていないことに気がついた。しくじったことは明らかだった。このままユウを止められなければ、幻花はやがて炎に変わって部屋を火の海に変える。聖花があるからユウは再び封じられるだろうが、その前にギルベルトは死ぬだろう。

悪魔は人間との「約束」に束縛され、それを破れば死ぬ。しかしユウは、これまでに何人も魔術師を殺している特殊な悪魔なのだった。今さら約束が効果を発揮するとは考えにくい。

説得しなければ、とギルベルトは口を開く。そうしなければ殺される。ユウは今、混乱しているだけだ。冷静さを取り戻させることのできる言葉をかければ、助かる可能性は高い。

「俺を殺したら、また一人ぼっちに逆戻りだぞ」

大声で呼びかける。目を覚ましてから、ユウはずいぶんうれしそうに見えた。あの喜びようがもし演技でないとしたら、この悪魔はずいぶん孤独を嫌っているのだ。

辺りを火花がちらちらと舞い始めて、近づくことができない。顔をかばった腕の間から、ユウをちらりと見る。うずくまった悪魔がゆっくりと顔を上げていた。しかし目が合った瞬間、悪魔は——さらに涙をあふれさせた。部屋の空気が一気に熱を帯びる。

「やだ！」

なぜ？ と疑問が頭の中を駆けめぐる。なぜ嫌だと言いつつ炎を強めるのか、ギルベルトには理解できなかった。

絶望をおぼえながら、ギルベルトは振り返る。案の定、扉はすでに幻花に覆われて逃げ道は絶たれている。しかしこの赤い空間に立ちつくしているのは、ギルベルトだけではなかった。

この局面でも、リーオは逃げようとはしていなかった。というより、逃げられなかったのだろう。リーオがリュビアの服の袖をつかんで、ふるえた声で言う。

「リュビア、なんとかできる？」

「やってみるけど……」

答えるリュビアも、いつになく緊張した面持ちをしていた。人間体になったことで力が弱まってはいるが、ユウはまちががなくリュビアよりも格上の相手だった。ユウは望めば、リュビアを今すぐ殺すことだって容易だろう。

悪魔は同族殺しをひどく厭(いと)う。同族殺しを命じられた悪魔は自ら死を選ぶほどに。しかし混乱した凶魔が、相手が同族かどうか判断できているとは思えなかった。

リュビアはユウにおそるおそる近づく。リュビアから流れる青い花びらが、ユウの炎とぶつかってぱちぱちと音を立てた。

「あなたは悪魔なのよ。だから家族がいないのは、仕方がないの」

リュビアのやわらかな声に、ユウは顔を上げた。目が涙でうるんでいる。

「ユウ、悪魔なんて知らない。ユウは……」

続きは言葉にならなかった。嗚咽(おえつ)が部屋の中に響く。ユウの両手が、何かを求めるように伸ばされた。リュビアがはっと目を見開く。

小さな手のひらを、リュビアの白い手が受けとめた。そのまま、リュビアはユウの体を抱きしめる。幼子をなだめるように、背中をゆっくりとさする。

ギルベルトは肌に触れる空気が冷えていくのを感じた。徐々に、炎が弱まっていく。炎が再び花びらへと姿を変える。「約束」はぎりぎりのところで、破られずに済んだようだ。

ユウはあいかわらず泣きながら、リュビアの服に顔をうずめている。リーオが残ってくれてよかった、とギルベルトは心の底から思った。リュビアがいなければ、ユウはおそらく怪物の姿に戻っていた。悪魔の心を静められるのは、やはり同じ悪魔なのだろう。

「リーオ、さっきは助かった。……それにしても何なんだ、あいつは」

泣きやまないユウを残して、ギルベルトは部屋を出た。ところどころ焼け焦げた服を替えるためだ。

リーオは疲れた顔で言う。

「約束を解いて、塔に帰す？ 僕、先が思いやられるんだけど……」

その言い分はもっともだった。ユユ・アサーディールはひどく暴走しやすいことがわかった。泣き出すたびに命の危機にさらされていては、命がいくつあっても足りない。けれど、

「……いや」

ギルベルトは首をふった。

悪魔の涙を浮かべた姿が、なぜだか脳裏に焼きついてた。もしこのまま塔に戻したら、ユユはどうなるだろう、とギルベルトはぼんやり考える。それ以前に、ユユを手放せば、強い悪魔を従える機会など、もう二度とめぐってこないだろう。凶魔を勝手に従えた罪を問われる可能性もある。

「判断するのはもう少し先でいいだろう。まだ慣れていないだけかもしれない」

次に目を覚ますと、そこにギルベルトの姿はなかった。

ユユはまた寝台に寝かせられていた。冷たい寝具が肌に心地よくて、このまま眠っていたい気もした。横たわって眠ることを気持ちいいと、今まで感じたことがなかったから。

小さな体はそのまま、枕元に広がる黒髪はあちこちからまっている。体が変わったことへの違和感は、もうなくなった。

「起きた？」

優しい声に振り向くと、銀髪の少女が部屋に入ってくるころだった。ギルベルトの近くにいた人だとは覚えているが、名前が思い出せない。

「えっと……」

「リュビアよ」

ユユの気持ちを読んだかのように、少女はほほえんだ。

「よろしくね、ユユ」

その言葉に、ユユは目をみはる。名前を呼ばれることが、なんだかすぐったかった。当たり前名前を呼んでもらえるようになったことのうれしさが、じわじわと体じゅうに広がっていく。

「……うん！ よろしくね、リュビア！」

ユユは寝台からおりて、部屋の中を走って一周した。自分の足音が軽快に響くのが新鮮だった。

それから、リュビアの方を見やる。

「リュビア、ギルベルトはどこ？」

リュビアは壁の向こうを指し示した。

「隣のお部屋にいらっしゃると思うけど……ギルベルト様に会いたいの？」

「うん、いっぱいお話したいの！」

ユユがそう答えると、リュビアは不思議そうな表情をした。その意味がわからず、ユユは首をかしげる。そして、リュビアが「ギルベルト様」と言ったことが気になった。どこで聞いたのかは覚えていないけれど、それは大人がえらい人と呼ぶときに使う言い方だと、ユユは知っていた。

「どうしてギルベルトをそんなふうに呼ぶの？」

覚えていないの？ とリュビアはユユの顔をのぞき込んだ。ユユがうなずくと、仕方がないというふうに首をふる。

「悪魔は、人間の僕(しもべ)だからよ」

「しもべ？」

「……悪魔より人間の方がえらいということ」

知らないことを訊ねると、大人は少し嫌そうな顔をする。けれどもそもそもユユは他の人と話したことがあまりないのだから、こうするほかは思いつかないのだった。

それにどうやらここの人たちは、ユユがもっといろいろなことを知っていると思い込んでいるようだ。

「どうして人間の方がえらいの？」

「どうしてって……それはあなたも知っているでしょう？」

「ううん、ユユ知らない」

リュビアは今度こそおどろいた顔をした。

「あなたは本当に特別な凶魔なのね」

ほめられていると思ったので、ユユはリュビアに抱きついた。しかしリュビアはそれには反応せず、視線をそらした。

「私たちの体はね、もともとは人間のものなのよ。それを勝手に奪ってしまったから、悪魔は悪い生き物なの」

不思議な話だが納得はできた。人のものを勝手にとるのは悪いことだというのは、ユユでも知っている。けれども、リュビアやユユがそういう存在のように思えなかった。

「リュビアも？」

「そう。ユユもよ」

ふうん、とユユは自分の体を見下ろす。手も足も、自分の力でめいっばい動かせる。これが自分のものではないなんて、にわかには信じられない。それでも、教えてくれるリュビアがさびしそうな表情をしているので、本当のことなのだろうと思った。

「じゃあ、前の人が悲しくならないように、大事にしくちゃね」

何気なく言うと、リュビアはユユをじっと見つめたあとに、少しだけ笑ってくれた。

「本当に、そうね」

* * *

それから数日が経った。

朝になり、廊下をぱたぱたと走る音が聞こえてくると、ギルベルトは憂鬱(ゆううつ)になる。

「ギルベルト、おはよう！」

扉が勢いよく開いて、寝間着のままのユユが飛び込んでくる。初日にあれだけ取り乱したのがうそのように、ユユはギルベルトになついていた。

「うるさい。話しかけるなと言っているだろう」

「どうして？」

「俺は人間で、お前は悪魔だからだ」

ユユは納得がいけないといった様子で首をかしげた。

「どうしてユユは悪魔なの？」

「知るか」

なぜお前のような奴が悪魔なんだ、とギルベルトは逆に訊きたい気分だった。そもそもギルベルトは子供が苦手だった。何を考えているのかさっぱりわからない。自分にも子供時代があったのかと思うと、信じられない気分になる。

「ユユは悪魔じゃないよ？」

「悪魔だと言っているじゃないか」

「ギルベルトたちが勝手に言ってるだけだよ。ね、ユユは悪魔じゃないよね？ ユユはいい子だもん」

「どちらにせよ、お前がお前なのは変わらない」

「それってどういうこと？」

「うるさい」

ユユはささいなことでもギルベルトに訊ねてくる。それにいちいち答えなければならぬのを、ギルベルトはうっとうしく感じていた。追い払おうとしても、少し語調を強めるだけで、ユユは泣き出しそうになる。本当は話をすることさえ面倒なのに、我慢してつき合わなければならなかった。そうやって悪魔のご機嫌をとっている自分にも、ギルベルトは腹が立つ。

「ねえギルベルト、早く遊ぼうよ」

いつのまにか遊ぶことになっているのもいつものことだった。イルマ邸にあった玩具をいくつか与えてみたが、すぐに飽きたようだ。

「遊ばない。お前は部屋でじっとしている」

「じゃあ一人でもいいから、お外に行ってもいい？」

「外は駄目だ。危険すぎる」

イルマが黙っていても、アサーディールの悪魔が塔から連れ去られたことは知れ渡っているだろう。ユユの今の容姿を知っている者がいるとは思えないが、この悪魔は簡単に他人についていってしまいそうだった。

「きけんって？」

「危ないということだ」

「ユユ、大丈夫だもん」

ユユは頬(ほお)をふくらませる。

「駄目なものは駄目だ」

ギルベルトが声を低くすると、ユユは不満げながらもようやく静かになった。部屋の中を歩き回り、何か面白いものはないかと探している。

それからしばらくして、ふと気がついた様子で、ユユはギルベルトに駆け寄った。

「ギルベルトは何してるの？」

訊ねながら、椅子に飛び乗って机の上に手をつく。積み上がった書類の山がぐらぐら揺れた。

「仕事だ」

ギルベルトは答えた。イルマはこの地域の領主だが、生粋(きつすい)の武人氣質(きしつ)である。ギルベルトたちを引き取ったあと、これ幸いとばかりに書類仕事を押しつけてくるのだった。

「お仕事！」

ユユは目をきらきらさせた。ギルベルトは嫌な予感をおぼえる。

「ユユも手伝う！」

「やめろ」

ギルベルトの制止も聞かずに、ユユは紙の山に手を伸ばす。

書類がユユの方に倒れかかる。体勢を崩したユユが、椅子から転がり落ちた。その後を追うように、ばさばさと大量の紙が床に散乱する。

「何をやるんだ！」

ギルベルトは怒鳴ってから、しまった、と思う。

ユユは頭にかぶった紙を振り払うと、大きく目を見開いた。黒い瞳がうるみ始める。しかし予想に反して、泣き出すことはしなかった。そのまま腕で目元をこすり、こらえるように唇を引き結ぶ。

「……リュビアのところにも行っている」

ギルベルトが抑えた声で言い終える前に、ユユは逃げるようにして部屋を飛び出していった。

ユユは自分の部屋の窓から外を眺める。

空は青く、白い鳥が何羽か飛び交っているのが見えた。眼下には広い庭園があり、その向こうには高い山がある。

窓からの光景は、塔にいた頃とそう大差なかった。外に出ることができないのも、あの頃の生活と変わらない。
——泣いているのも、変わらない。

ユユは鼻をすすった。鏡台で自分の顔を確認する。赤みはだいぶ引いて、もう泣いていたとはわからないくらいだった。頬にできた涙の跡を、袖でこすって消す。

泣いている姿を見せるのは嫌だった。すぐ泣く、小さな子供だとは思われたくない。

泣いた形跡が残っていないか入念に確かめてから、ユユは自分の部屋を出た。

リュビアは椅子に座って編み物をしていた。いらっしゃい、とユユに声をかけると、すぐ手元に目を戻してしまう。部屋には玩具は一つもなく、やはりリュビアは大人なのだとユユは思った。きれいに整頓された部屋のあちこちに、紫色のきれいな花がかざられている。

静かな部屋に、外を吹く風の音が響く。時がゆっくりと流れていくようだった。

「リュビア、ユユと遊ぼうよ」

「これが終わったらね」

リュビアは穏やかに答えた。

きれいな銀色の髪に、透きとおった空色の瞳。まばたきをするたび長い睫毛(まつげ)が揺れて、精巧に作られた人形を思わせる。

「リーオは、リュビアのお兄ちゃんなの？」

ユユがふと訊ねると、リュビアは身をかたくした。顔を上げて、ユユを見る。編み物をしている手が止まった。

「いいえ、ちがうわ」

「でも、リーオとリュビアってそっくりだよ」

二人がほとんど同じ顔をしていることに、ユユは気がついてきた。ただ、リュビアの方が背が低く、顔立ちも少し幼い。だから、きょうだいだと思ったのだ。

「この体は、ルーア・エトワールのもものだから」

リュビアはつぶやいて、目をふせた。その苦しそうな表情に、ユユはどきりとした。

「私という悪魔が、ルーア・エトワールの心押し潰して、生まれてきてしまった。そのせいで、リーオは家族の姿をした化け物をそばに置かなくてはならなくなったの……」

リュビアが何を言っているのか、ユユにはよくわからなかった。けれどそれが何か大事な話で、リュビアが悲しんでいることはわかる。ユユは自分なりに理解しようと考えた。

「……ルーアが、リーオの大切な人だったから、リーオは怒ってるの？」

ユユが訊ねると、リュビアは少し意外そうに目を見開いたあと、うなずいた。

「そうよ。私が生まれたことで、ルーアはいなくなってしまったの」

リュビアが泣き出しそうに見えたので、ユユは自分まで悲しくなる気がした。リュビアの腕に抱きつくようにして言う。

「そんなのおかしいよ。わざとじゃないのに怒るなんて」

ユユの言葉に、リュビアは目を閉じた。優しい手がユユの頭を撫でる。

「おかしい、おかしくない、の話じゃないのよ。リーオが許すか許さないか。それが今の私にとって、いちばん大切なことなの」

ユユはもう訊ね返すことはしなかった。リュビアの言葉でふと、自分にとって大切なことは何だろう、と思ったのだ。

ギルベルトの顔が頭に浮かぶ。

「ねえリュビア」

「何かしら？」

「ギルベルトに会ったとき言われたんだけど……『信じて』って、どういう意味？」

あのときはよくわからないままうなずいてしまった。今さらギルベルトに訊いても、怒られるだけだとユユは思う。

リュビアはおどろいた顔をして、それから優しくほほえんだ。リュビアのその表情が、ユユは好きだった。そんな表情を、ギルベルトもしてくれたいのと思う。

「それは、約束の言葉ね」

「約束？」

そう、とリュビアはうなずいた。

「本来はどんな内容でもいいらしいけれど、慣習として、『信じる』になっているみたい」

リュビアの言葉は難しかったので、ユユにはよく理解できなかった。

「ユユはどうすればいい？ どうすれば、ギルベルトを信じるってことになるの？」

その約束を守らないから、ギルベルトは笑ってくれないのかもしれない、とユユは思った。

「説明するのが難しいのだけど……」

「『信じて』っていうのは、ずっと好きでいてほしいという意味……だと私は思っているわ。ユユは、ギルベルト様のことが、好き？」

「うん、大好き！」

笑ってくれなくても、怒られてばかりでも、ユユはギルベルトのことが好きだった。あの暗い部屋からユユを助け出してくれた人だから。ユユのことを呼んでくれた人だから。ユユの小さな世界の中で、ギルベルトはただ一つの太陽だった。

ギルベルトがいなくなれば、ユユにはもう誰もいない。リュビアは優しいけれど、ユユよりもリーオの方が好きなのを、ユユは知っている。ただ一人だから、ユユはギルベルトを好きでいなければならない。このしあわせを守らなければいけない、とユユは思った。

* * *

ある晩ユユが寝入ったあと、ギルベルトはリーオたちの部屋の扉を叩いた。返事を待たずに入ると、リーオはすでに寝台にいた。寝具から伸ばされた手が、寝台の隣で椅子に座るリュビアの手を握っている。

ギルベルトが入ってきたことに気づくと、リーオは起き上がって、ぱっと手を離れた。視線を天井の方へ向け、頬を赤らめる。

子供か、と思ったが口には出さない。リュビアと——ルーアと手をつないでいないと悪夢を見るのだと、以前に本人から聞いていた。二年前、姉を失ったことを、リーオはまだ乗り越えられていない。

「話があるんだが、いいか？」

もちろん、とリーオはうなずいた。ギルベルトの疲れた顔に気づいたのだろう。リュビアが椅子を運んでくる。

ギルベルトに視線を向けられると、リュビアはびくりと怯えた表情になった。ギルベルトはなんとなく安心する。顔を見るといつもうれしそうにするユユの方が異常なのだと思直した。

「リュビア」

こうして話しかけるのははじめてかもしれない。主以外の人間が悪魔に直接話しかけることは通常ありえない。他人の従える悪魔には、主を通して話すのが常だった。

リュビアは戸惑った様子で、はい、と小さく返事をした。

「あいつは、本当に悪魔なのか？」

訊ねると、リュビアはちらりとリーオを見やった。リーオが軽くうなずく。それから、リュビアはためらいがちに口を開いた。

「……同族は、見ればわかります。ユユ・アサーディールはまちがいなく、私たちと同じ悪魔です」

「——でも、本人に自覚がない」

リーオがつけ加える。

それが、最も不思議なところだった。悪魔は生まれたときから、自分が何者であるかを知っている。そして約束を結べば、よほどのことがない限りは人間に従うようになる。

しかしユユは、五百年以上もの歳月を生きてきた悪魔には到底見えない。演技とも思えぬ幼さが、戸惑いを生んでいるのだった。

「悪魔は約束を破ったら死ぬのが普通だ。でも、ユユは死なない代わりに、記憶を失うのかもしれない」

リーオの言葉に、リュビアがうなずく。ギルベルトも同意見だった。ユユ・アサーディールが人間との「約束」を破ったことは、一度や二度ではないはずだった。最初に目を覚ました日の様子からしても、約束破りを避けようとしているようには思えない。それは、約束を破ったことをユユが覚えていないことを意味している。

「厄介なのはやはり、あいつが自分が悪魔だということすら忘れてのことだな」

だからこそ、ユユはこれまで凶魔として幽閉されてきたのだろう。普通の悪魔とは明らかにちがう。

「そもそも、悪魔は人間のために生まれて、人間のために死ぬ生き物だろう？ 世界が始まってから今まで変わっていない理(ことわり)が、なぜあいつには通用しない？」

悪魔を扱う魔術師——貴族が、いちばんはじめに教えられること。それは、悪魔という生き物の罪だった。悪魔は生まれた瞬間に、人間の体と心を奪う罪を犯す。そしてその体を、醜悪な姿に変えてしまう。その償(つぐな)いのために、悪魔は人間に支配される。それはグランゼリアでは周知の事実だった。悪魔を操れない平民でさえ、悪魔のことを忌み嫌う。

「ちがうよ」

唐突な否定の言葉は部屋の入り口、扉の方から飛んできた。ギルベルトが振り返ると、ユユが寝ぼけまなこをこすりながら立っていた。廊下の明かりがユユを背中から照らして、幼い顔に影が差す。

「王様を変えたんだよ。そうあるように、悪魔全部を、変えちゃった……」

その声はたどたどしくも力強い。しかし目はふらふらと辺りをさまよって、どこを見ているのかわからなかった。

「でもね、アサーディールは後悔してるんだ。だから、約束の花が咲いたら、きっと……」

ギルベルトは戸惑いをおぼえた。ユユがユユでないような気がした。

「何の話だ？ 夢を見ているのか？」

ギルベルトの言葉に、ユユは今まで見たことのない表情で、あざけるように笑った。その視線がはっきりと、ギルベルトをとらえる。瞳だけがあやしく光って見えた。

「——見てたんだよ」

そのあまりにも哀しそうな表情に、ギルベルトは虚を衝(つ)かれた。続ける言葉を見つけられず、押し黙る。静寂がひたひたと、部屋をうずめていく。

そしてその静寂は唐突に、薄氷のように破られた。

「あれ？」

そのすっとんきょうな声は紛れもなく、ユユのものだ。

ユユは大きくまばたきをすると、不思議そうにギルベルトを見る。

「ギルベルト、なんでここにいるの？」

「お前が起き出してきたんだが」

その返答を聞いてはじめて、ユユは自分が立っていることに気がついたようだった。首をかしげて、ギルベルトの袖を引く。

「ギルベルト、ユユが寝るまで隣にいて？」

いつものユユだった。ギルベルトは半ば安堵しながら、いつものように返す。

「一人で寝ろ」

「……はい」

快い返事をもらえないことは、ユユもわかっていたようだった。眠いのか、食い下がることもせずに来た道を帰っていく。

「何、今の」

リーオがつぶやいたが、ギルベルトもリュビアも、答えることはできなかった。

ギルベルトは胸に手を当てる。心臓がやけに激しく鼓動を打っていた。

「ルーア……ルーア」

寝入ってからすぐ、苦しげに姉の名を呼ぶリーオの手を、リュビアはそっと撫でた。

「大丈夫ですよ」

リーオの額には汗がびっしり浮いている。こうしてうなされるのは珍しいことではなかった。姉が突然悪魔に変わってしまう悪夢に、リーオはずっと苦しみ続けている。その頻度は徐々に減ってきているものの、三日に一度はこうしてリュビアが手を握っていなければならなかった。

リーオはぱっと目を開いた。荒い息を吐(は)き、顔に恐怖を浮かべている。

「私はずっとここにいます。いますから」

落ち着かせるように言いながら、リュビアは自分の両手で、リーオの手を包み込む。リーオの目がリュビアをとらえた。

「ルーア……」

つぶやいたかと思うと、一瞬のうちに、リュビアの手を乱暴に振り払う。

「ルーアはそんなしゃべり方じゃない！」

幾度となく聞いた叫び。ルーアはもういないのに、体だけがこうして形を残していることは、リーオにとっては残酷なことなのかもしれなかった。

どうして自分がルーアの体を奪って生まれてきたのか、リュビアにはわからない。決して人間の体を奪いたいと願ったわけではない。ましてや仲の良い双子の片方を奪ってしまうなど。

「ごめんなさい」

苦しさに満ちた声。きっとこんな声も、ルーアは出さないのだろう。

リーオの表情に冷静さが戻っていく。だんだんと意識が覚醒してきたようだ。正気の戻った目でリュビアを一瞬見たかと思うと、ふいに背を向ける。振り返ることはなく、リュビアはただ、その背をじっと見つめていた。

寝息を装った呼吸音が、部屋の中に静かに溶け込んでいく。

たったそれだけの音でも、涙の落ちる音をかき消すには十分だった。

「ねえねえギルベルト、ねえねえねえ、お外に出るって本当？」

「うるさい、黙れ」

ユユはなおも興奮をおさえきれない様子で、ギルベルトの周りを跳び回る。ユユの動きに合わせて、幻花と一緒に跳ね舞った。ユユを連れて外出すると伝えた瞬間から、ずっとこの調子だった。

「ね、いつ出かけるの？」

「日が暮れてからだ。外で寝ないよう、今から出発まで寝ておけ」

聞くわけがない、と思いながらも、ギルベルトは言う。そして自分がそう思っていることに気がついて、顔をしかめた。悪魔が主の言うことを聞かないなどということは、ありえないはずなのに。それも、無理なことを言っているのではないのに。異常に慣れていっている自分が嫌だった。しかし、

「うん！ わかった！」

返事をするやいなや、ユユは軽い足取りで部屋を出て行った。ギルベルトは一人部屋に残され、呆気にとられる。

今日はずいぶん素直だな、とギルベルトは思った。ユユはよほどうれしいのだろう。ただ外に出るといっただけであれほど喜ぶユユがうらやましくさえある。

ともかく、これで準備の邪魔をされることはない。今晚の外出の目的は、平民の町にいる同志から情報をもらうことだ。フォンテ伯爵領を出れば、その先は国王派貴族の私兵がうろつく地帯になる。リーオとも入念に打ち合わせる必要があった。

それに、目的はもう一つ——と、ギルベルトは目を細める。不安が胸をよぎった。

「ねえ！ 寝れない！」

そんな叫び声とともに再び悪魔が部屋に転がり込んできたのは、それから少しあとの話である。

「そうか……やっぱりいいないか」

ギルベルトは肩を落とした。

残念ですが、と連絡係の男がうなずく。

かつてギルベルトとリーオが所属していた隊は、少し前に起きた国王派との小規模な争いで壊滅した。それで二人は拠所(よりどころ)を失い、イルマの保護下に入ったのだ。

生き残りが見つからないか確かめに町までやってきたが、無駄足に終わった。結局、ギルベルトの仲間はリーオだけだった。

ギルベルトの沈んだ表情に気がついたのか、ユユは騒ぐことなくじっとしていた。目深(まぶか)にかぶった頭巾の下、その目だけが何か言いたげにきよろきよろと動いたが、言葉を見つけれないようだった。

階段を上って地上に出ると、すでに黄(おう)月(げつ)が真上にあつた。夜更けである。

町はしんと静まりかえって、ギルベルトたちのほかには誰の姿もない。広い路地を、つめたい風がゆっくりと吹きぬけていく。路上で暮らす平民も、この地区には近寄らない。

静寂に紛れるようにして、ギルベルトたちは無言で帰路を歩く。ユユだけが物珍しそうに辺りを見回していた。

風上から、夜闇にきらきらと光るものが流れてくるのに、ギルベルトは気がついた。隣で同様に、リーオが体を強張らせる。

「リュビア」

リーオが呼ぶその前に、リュビアはすでに動いていた。リュビアの青い幻花がぶわりと広がり、ギルベルトたちを覆う。

光が流れてきた方向にあらわれたのは、複数の人影だった。そのうち二人は緑色の制服を着ているので、この地域を治める男爵の私兵だとわかる。

そして残る二人が、複雑な色の花びらをまとってさっと前に進み出る。私兵の従える悪魔だろう。

国王派の男爵の管理する町。平民が避ける理由は、悪魔持ちの私兵が町を巡回していることにある。

相手の悪魔の幻花が、剣のようなすどさをもって飛んでくる。しかしそれはリュビアの幻花に阻(はば)まれて、刃の形を成す前にかき消された。

リュビアの瞳がきらめく。鮮やかな青が生き物のようによごめいて、辺りを囲んだ。敵の逃げ場をなくしたのである。

相手は人間も悪魔も、明らかに狼狽(ろうばい)していた。こちらが平民だと踏んでいたのだ。リュビアもユユも厚い外套を羽織っているのだから、遠目には悪魔とわからなかったのだろう。

舞台はととのった。ギルベルトはささやく。

「ユユ、あいつらを殺せ」

あとは殺すだけだった。地位の低い連中の従える弱い悪魔に、ユユやリュビアが負ける可能性は万に一つもない。

ギルベルトの言葉に——ユユは立ちすくんだまま動かなかつた。

「ギルベルト、帰ろうよ。あの人たち、こわい」

ふるえる声でつぶやいて、ユユはギルベルトの服を引っ張った。ギルベルトはその手首をつかんで引きはがす。くれようとするユユを、自分の前に立たせる。

「ユユ、これはお前にしかできないことだ。俺にはできない」

「ギルベルトには、できない？」

ギルベルトが力強くうなずいてみせると、ユユは少し視線を上げる。

「幻花で——魔法で、あいつらを燃やせ」

ユユの周りを、赤い花びらが揺れ動く。その揺れが止まった頃、ユユは決心したように顔を上げた。

ユユがまばたきを一つすると、私兵とその悪魔の周りに赤い幻花が舞った。そして次のまばたきで、それは炎となる。

夜の町が、赤色に照らされる。

悲鳴はなかった。敵は抵抗する間もなく一瞬で、燃え上がって、燃えつきた。二人の人間と二体の悪魔は跡形もなく消え去り、まるで最初から何もなかったかのように、路地を風が吹いていく。

あまりのあっけなさに、ギルベルトはしばらく茫然として、少し焦げた路地を眺めていた。リーオとリュビアも、おどろいて声も出せずにいる。

これが、ユユ・アサーディールの力。それも、おそろおそろ使ってみただけでこの威力だ。

ふと我に返ると、ユユが不安そうにギルベルトを見つめていた。

「ユユ、できてた？」

「ああ、よくやった」

ギルベルトはユユの頭を撫でた。思えば、ギルベルトの方からユユに触れるのは、これがはじめてだった。

ユユは少し目をみはって、それからあいまいに笑った。その体がかしいで、ふらりと倒れそうになる。

ギルベルトがあわてて受けとめると、ユユはすうすうと寝息を立てていた。

「ギル、わざとあの道を通っただろう」

フォンテ伯爵領に入り、襲撃の危険もなくなった頃、リーオがため息をついて言った。

「わかったか」

ギルベルトは苦笑する。ユユはあれから起きることなく、ギルベルトの背中の中で眠っていた。そのユユを、リーオがちらりと見やる。

「ユユを試したんだね」

「力の面では問題ないことがわかった。あとは、慣れだろう」

いつまでもユユを遊ばせておくわけにはいかない。この悪魔の真価は、その能力にあるのだから。

遠くない未来、国王派と革命軍の本格的な戦いが始まる。その中を生き抜き、妹を殺した貴族たちを殺してやるために、ギルベルトはユユを選んだのだ。そして思いがけないことではあったが、ユユは自分が悪魔であることを認めていない。それならば、同族殺しも容易にできるのではないかとギルベルトは考えていた。

けれど、胸の中がもやもやとして晴れなかった。自分でもよくわからない何かが、ギルベルトの心を乱している。

イルマはユユを使って戦えと言うだろう。リーオも、ギルベルトが復讐を果たそうとしていることを知っている。死んだ仲間がこの場を見ていれば、ユユの力におどろき、それから喜ぶだろう。これで仇(かたき)を討てるな、と。

ギルベルトも、そのつもりだった。しかし同時に、自分が何か大きなものに押し流されているのを感じていた。このままではいけないと、心のどこかで何かが叫んでいるようだった。しかしその巨大な奔流に逆らうすべを、ギルベルトはまだ、思いつかない。

親指ほどの大きさの甲虫たちが、硬い草の葉を食(は)んでいる。ユユが低木からむしってきた葉だ。五、六匹ほどの虫は一匹残らず、ユユには見向きもせず、一心に葉の端をかじっている。

ユユはその中の一匹をつまんで、手のひらに置いた。虫は硬直したように動かない。その上に、ユユはもう片方の手を重ねる。そっと力をこめる。

虫が音もなく潰れ、体液がにじみ出した。手のひらにできた緑色の染みを、ユユはじっと見つめる。平らになった虫の体から飛び出た細い脚がぴくぴくと動く。これまで虫を気にしたことなどなかったのに、泣きたい気分だった。

残り四匹のついた葉を持ち上げる。隣の仲間が死んだことに気づいていないのか、虫たちはあいかわらず餌に夢中だった。ユユはそれを一匹ずつ、指で潰していく。手がべったりと緑色に染まった。

最後の一匹が、ようやく危機を悟ったのか、羽を広げて飛び上がる。そしてユユの幻花に当たり、小さな炎になって消えた。

階段を上ってくる足音が聞こえて、ユユは廊下に顔を出した。やってきたのは、イルマという女の人といつも一緒にいる、ヴェーノという男だった。リュビアが言うには、ヴェーノも悪魔らしい。

背はひょろりと高く、あまりしゃべらない。青白い顔は茶色の髪にほとんど覆われてよく見えないので、どんな表情をしているのかもよくわからなかった。

「ねえ、待って！」

ユユはヴェーノの前に飛び出した。見かけたことは何度もあるが、話をしたことはない。ヴェーノがどんな人なのか気になってはいたが、一緒にいるイルマが怖くて声をかけられずにいたのだった。

話しかけられたことにおどろいたらしく、ヴェーノは立ちどまって、少し沈黙したあとに口を開いた。

「何か用ですか？」

用と言われると、これといってもものはない。けれど、ないのならこれから作ればいいのだ。

「あのね、一緒にリュビアの部屋に遊びに行かない？」

ヴェーノの顔はあいかわらず見えない。けれど、顔をしかめたのが雰囲気 でわかった。

「私は仕事ですので」

私、という言い方が面白いな、とユユは思った。男の人が自分をそう呼ぶのをはじめて聞いた。

「じゃあ、そのお仕事が終わったら？」

「無理です」

「どうして？」

「私はあなたのためではなく、主のために生きているので」

ユユはまばたきをする。ユユにはそれが不思議だった。リュビアも、自分よりリーオの方が大切だと言う。

ユユにとってギルベルトは大切だけれど、ギルベルトのために生きているわけではない。

「じゃあ、相手の人を殺せって言われたら、ヴェーノはその人を殺す？」

「主の命令とあらば、殺すに決まっているでしょう」

ヴェーノは間髪を入れずにはっきりと答えた。それが子供に言い聞かせるような口調だったので、ユユは少し悲しくなった。

「……ヴェーノは苦しくないの？」

ユユは首元に手を当てる。人を燃やしたときも、虫を潰したときも、苦しかった。喉の奥がぎりぎりとしめつけられて、息ができなくなるような気がした。

「苦しいわけがないでしょう。私のすべては、主のためにあるのだから」

リュビアやヴェーノは、ユユとはちがう。そのちがいが何なのか、ユユにはわからなかった。

ユユは小さな両手を見つめる。ユユが子供だから、こんなに悲しいのかもしれないと思った。大人になれば、リュビアのように、ヴェーノのように、「あるじ」のために何も苦しまずに生きることができるとも思えない。

「……大人にならなきゃ」

ユユはぼつりとつぶやいてみる。大人になりたくないと思った。

「ギルベルト！ 何かやることない？」

赤い花びらを舞い散らせて、ユユが背中に飛びついてくる。腕で首が絞められる形になり、ギルベルトはユユを振りほどいた。

思いのほか強い力でぶつかられたので、喉に痛みが残る。首に手を当てながら、ギルベルトはユユを見下ろした。

「部屋で一人で遊んでいろ。それかリュビアにでも遊んでもらえ」

「ギルベルトの部屋でやることを探してるの！」

ユユは不満をあらわにしながらも、部屋の中を見回した。その視線が、何かをとらえる。

「あ！ ユユ、お掃除する！」

ユユは部屋の隅に立てかけてあった箒(ほうき)を手にとった。ギルベルトはため息をつく。この悪魔はいつもこれだ。

「勝手なことをするな」

ユユに何かをやらせるとろくなことがない。役に立たないどころか、後始末に追われるのが常だった。できもしないことをなぜやろうとするのか、ギルベルトにはわからない。

捕まえようとしたギルベルトの手をするりと抜けて、ユユは箒を持ったまま駆け出す。

振り回された柄の先が、壁に掛かった花瓶に引っかかる。

花瓶が床に叩きつけられ、にぶい音を立てて割れ砕けた。造花と聖花と水とが、床にまき散らされる。花瓶の破片が飛んで、ギルベルトの頬に小さな傷を作った。

その小さな痛みが、心の中でくすぶっていたものに火をつけた。しかし同時に、頭の芯が冷えていくような感覚もする。

「あ……」

ユユがはっとして動きを止める。箒を放り出し、ギルベルトに駆け寄ってくる。

「ごめんねギルベルト、大丈夫……？」

ユユが頬に伸ばしてきた手を――ギルベルトは振り払った。

「なぜお前は余計なことばかりするんだ？」

相手は伝説の凶魔だから、とギルベルトは色々なことをユユに許してきた。けれどユユはそんなことにはお構いなしに、ただの子供のようにギルベルトに接するのだ。

悪魔なのに人間みていることに戸惑っていた。しかしそれ以上に、ユユとのやりとりを少しだけ心地よく感じている自分に戸惑っていた。

だから、この関係はもう終わらせなければならない。

「ユユ」

ギルベルトは悪魔の名前を呼ぶ。妹の仇を討つためには、いつまでもこの関係ではいられない。ユユ・アサーディールは冷酷に敵を屠(ほふ)る悪魔でなければならない。それならばギルベルトもまた、ユユを許してばかりいる主であってはいけないのだ。

そのことをどうユユに伝えればいいのか、ギルベルトは少し思案した。ユユの、いつも背伸びをしようとする姿を思う。

「お前はもう、子供じゃないだろう？」

ギルベルトの言葉に、ユユは動きを止めて目を見開いた。その目に、涙がいっぱいにたまっていく。その体を、幻花のうずが取り巻いていく。

「ユユ？」

ギルベルトは呼びかけたが、もうユユには聞こえていないようだった。なぜこの言葉で泣き出すのか、全く見当がつかない。

悲鳴のように、ユユは叫んだ。

「ギルベルトなんてだいきらい！」

「ユユ、その言葉は——」

その言葉はまずい。敵意を示された怒りより先に、焦りがギルベルトの中でふくれ上がった。約束を結んだ悪魔と人間には、口にはしてはいけない類の言葉がある。今のユユの言葉がまさにそれだった。直接的に不信を口にすることは禁忌とされているが、ユユがそれを知っているとは思えない。

「うるさい黙って！」

一瞬だった。一瞬で、部屋を埋めつくすほどの幻花が現出した。舞い降りる花びらの一枚一枚が、あやしく光り出す。熱気が充満し、ギルベルトの額を汗が伝い始めた。

何をどこで間違えたのだろうか。ギルベルトは思う。きっと、最初からだ。ユユ・アサーディールは、悪魔としての責務に耐えられるだけの心を持ってはいなかった。はじめから、ギルベルトにユユを従えることなど不可能だったのだ。

ユユはわあわあと声を上げて泣いている。これが悪魔の演技だったならたいしたものだった。ギルベルトはとうに気づいていた。ユユの心が、本物の人間の子供のそれであることに。それでも、これ以上どうすればいいのか、ギルベルトにはわからなかったのだ。

何度命令しても聞かない。何もわかっていない。悪魔の体は成長することがない。それなら、ユユは心までもが、永遠に幼い子供のままなのかもしれない。言ってみようになるならまだ我慢できる。しかし命令し続けてもそむき続けるなら——この関係は、たとえ今崩れなかったとしても、近いうちに必ず破綻する。

「どうして……」

ユユのつぶやきが聞こえた。その姿は、すでに揺らぎ始めている。体の輪郭がときどき炎に混ざって、元に戻るのを繰り返す。

ユユにかける言葉を、ギルベルトはもはや持たなかった。もう何を言ってもむだだと思った。

赤い空間の中、ギルベルトは泣いているユユを見つめた。その姿が、遠い記憶の中の妹と重なる。ギルベルトの死んだ妹も、ユユと同じくらいの年頃だった。

グランゼリアでは、殺したり殺されたりすることなど珍しくも何ともない。隣にいた誰かが死ぬことも、当たり前のように受け入れるのが普通だった。現にギルベルトも、両親の死を今では何とも思っていない。悲しみは一瞬だけで、とうに過ぎ去ってしまった。

だというのに妹のことだけは、ずっと忘れられずにいる。貴族を倒して復讐すること。それをやめてしまえば、ギルベルトには生きる理由がなくなってしまうからだ。

ギルベルトは一步、ユユに近づいた。

「お兄ちゃんだと思ったのに……」

ユユの発した言葉に、ギルベルトは立ちどまる。

「ユユの、お兄ちゃんになってくれると思ったのに……」

それを聞いても、もう怒りはわいてこなかった。

ギルベルトは、ユユの孤独を思った。生まれてからほとんどの時間を、暗い塔の中で過ごした子供。誰にも理解されないまま、ユユは一人ぼっちで生きてきたのだ。

ギルベルトには仲間がいた。共に戦ってくれる人たちがいた。死が普通のことなのは、いつも隣に誰かがいるからだだった。

それでも、妹を忘れることはできないのだ。ならば、ユユにとっての「お兄ちゃん」は、どれほど特別な存在だったろう。ギルベルトははじめてそのことに思い当たった。

ギルベルトはさらにユユに歩み寄る。このまま焼き殺されるなら、立ちどまっても、そうでなくても変わらないと思った。ユユの正面にかがみ込み、小さな背中に腕を回す。

振りほどかれるかと思ったが、ユユはギルベルトにしがみついた。肩につめたい涙の感触がする。リュビアの動作を思い出しながら、ギルベルトはユユの背中をぼんぼんと叩いた。

「どうして俺が兄になると思った？ 俺はお前に優しくした覚えはないが」

ユユはしゃくり上げながら、ギルベルトの肩から顔を離した。まだ涙の止まらない目で、ギルベルトをしっかりと見つめる。

「ユユは、ギルベルトのこと大好きなんだもん。……ユユには、ギルベルトしかいないんだよ」

そんなことをまっすぐに伝えてきたのは、ユユがはじめてだった。この退廃した世界で、そんな言葉を吐く者は、馬鹿か嘘つきのどちらかだとギルベルトは思っていた。

ユユはそれから目をふせた。止まりかけていた雫が、またぼたぼたとギルベルトの服に落ちる。

「でも、だめだった……。ユユはギルベルトのためにがんばったけど、全部うまくいかなかったの。お仕事も、お掃除も……。悪い人を殺すのはできたけど、なんだかとっても、泣きたい気持ちになるの……」

そうか、とギルベルトはうなずいた。自分を悪魔と思わないユユなら、悪魔を殺すことだってできると思った。しかしこの子供は、何かを殺すこと自体がつかつたのだ。そのことに、気づかなかった。

だから、ギルベルトは言った。

「お前も災難だったな、やっと出会った人間がこんな奴で。俺しかいないから、俺を兄にするしかなかったんだろ
う」

ギルベルトは自嘲ぎみに笑った。しかし同時に、今までの主も同様だったのだろう、と思う。これまで誰も、ユユを従えることはできなかった。ギルベルトも、その列に加わるだけだ。

と、周りの温度が急速に下がっていくのを感じた。ギルベルトはおどろいて、辺りを見回す。炎になりかけていた幻花が、元の花びらに戻っていく。

涙の止まったユユが、なぜか呆れ顔でギルベルトを見ていた。

「ギルベルトって、ばかだよな」

「なっ」

涙の跡がなければ泣いていたとはわからない顔で、ユユは唐突に言った。怒る気力もなく、ギルベルトはただ顔をしかめる。

ユユはそれからなぜか、にっこりと笑った。

「あのねギルベルト。ユユは、もしギルベルトが嫌な人だったら、お兄ちゃんになってほしいなんて思わないんだよ」

まるでユユではないようだ、とギルベルトは思った。けれどそれは確かにユユの言葉だった。

ギルベルトの妹も、ユユの兄も、もういない。

お互いのその穴を埋めるために、自分とユユは出会ったのかもしれない、とギルベルトは思った。

開け放した窓から、赤く色づいた葉が舞い込んでくる。ユユがそれに気がついて、うれしそうに拾い上げた。

書類仕事に追われていたギルベルトも、手を休めて伸びをする。ギルベルトの机の隣には、子供用の小さな机がある。その上に、ユユがさきほどまで向かっていた紙が置かれていた。

「何か描けたのか？」

ギルベルトは紙をのぞき込む。様々な色の絵の具でぐちゃぐちゃと描かれた何かがあった。

「お花畑だよ！」

ユユが落ち葉をくるくるともてあそびながら答える。ギルベルトは改めて絵を眺めたが、到底花畑には見えなかった。

「お前、花畑を見たことがあるのか？」

「ないよ！」

ユユは即答して、自分の描いた絵をしげしげと見た。

それから何かを思い出したように、窓の外を見やる。遠くに山々がそびえている。

「ギルベルト！ ユユ、行きたいところがあるの」

ろくに荷物も持たずに飛び出していったユユを追いかける形で、ギルベルトはリーオたちとともに山道を歩いていた。

「お山の中にね、お花畑があるんだよ」

ユユは誰に言うでもなくつぶやいて、迷いのない足取りで進んでいく。人が立ち入った形跡のない山だったが、ユユでも転ばずに歩けるほどの、陰しくはない場所だった。

「そんなものはないと思うけど……」

リーオがぼやく。ギルベルトも同感だったが、なぜかユユを止めることができなかった。結果、ユユの分の荷物も背負って歩くことになっている。

青く生い茂った樹木が、空を覆いかくす。太陽がほとんど見えなくなり闇が濃くなっても、ユユは足を止めなかった。自らの幻花を明かりにして、一心不乱に歩いていく。陽光が完全に届かなくなった頃、道が下りに転じ、やがて平坦になった。

暗い細道を抜けると、一気に視界が開ける。

そこは山中にあるとは思えないほど、広い空間だった。ギルベルトの立っている位置から、なぜか地平線まで見通せる。

木は一本も生えておらず、地面は青い草で覆われている。空から降りそそぐ陽光は、何も遮(さえぎ)るものがないはずなのに山の外よりも弱々しかった。

さあ、と風が吹きわたるたび、空の色が変わっていく。ふくらんだ新芽の色から、枝を離れた枯れ葉の色へ。雲はなく、星のひとつもない。

「何だ、ここは？」

ギルベルトはつぶやいたが、誰も答えることはできないようだった。リーオとリュビアも、よく似た顔に戸惑いの表情を浮かべて辺りを見回している。

その中で、ユユだけがちがっていた。ぼうぼうと生えた草をかき分け、一直線に、どこかに向かっていく。

「どこに行くんだ？」

ギルベルトが呼びかけても、ユユは振り向きさえしなかった。小さな体は、ともすれば見うしなってしまうようで、ギルベルトは足を速めてユユを追う。風が冷ややかに両脇をすり抜けていく。草のこすれる音が、くすくすとささやき笑う声に聞こえた。

ぎらりと一瞬、太陽がまぶしく光る。ギルベルトが思わず目をつむって、次にまぶたを上げたときには、ユユは立ちどまっていた。その足元には一輪だけ、小さな花がある。

紫色の聖花。よく見れば、それはまだ蕾(つぼみ)だった。周りを草に囲まれて、頼りなげに揺れている。

それを、ユユが無造作に摘みとった。止める間もないほどに、自然な動きだった。

ユユはその蕾を、いとおしそうに撫でる。その視界には、ギルベルトも、リーオもリュビアも、映ってはいないようだった。

「ユユ？」

たまたま、ギルベルトは声を上げた。

ユユは夜空色の瞳をきらめかせながら振り向いた。

「やっぱり、この選択はまちがだったのかもしれない。リュビアもそう思うだろう？」

ユユが発したとは思えないほど大人びた口調に、ギルベルトは胸の中がざわつく感覚をおぼえた。

「え……」

突然問いかけられたリュビアはわけがわからないといった様子で、動けないでいる。

ギルベルトはユユ——の姿をしたものの前に進み出た。

「お前は誰だ。ユユはどうした」

「わたしはユユ・アサーディールだよ。ユユとアサーディールとは、残念ながら分かつことのできない存在だから」

ユユ・アサーディールを名乗るその声は、しかしユユとは似ても似つかないほどに、つめたさを帯びていた。

「だがお前はユユとはちがう。何者なんだ」

ユユ・アサーディールはその間には答えずに、遠くの空を見上げた。

「償いの夜は、もうすぐ終わる」

花のせいだ、とギルベルトは気づいた。あの花が、ユユを変にしている。ギルベルトはユユから花を取ろうとする。

しかし花はユユの手から離れなかった。茎をつかんだ小さな手は、ギルベルトが開かせようとしてもびくともしない。信じられないほどの力だった。

「ギルベルト・オルディアン」

ユユがギルベルトの名前を呼ぶ。その声色もまた、冷え切っていた。

「お前はユユの兄ではないよ」

「知っている」

ギルベルトは困惑した。なぜそんな当たり前のことを言うのかと思った。

ユユはじっとギルベルトを見つめる。何かを見定めているようだった。ギルベルトも、ユユの瞳から目をそらすことができなかった。

夜の色をした瞳に、うっすらと空の色が映り込んでいる。まばたきごとに色を変える光が、ユユのくるくる変わる表情のようだ、と、ギルベルトは思った。

先に視線を外したのはユユだった。ふいに笑ったかと思うと、ぱっと手を開く。蕾が宙に放り出され、地面に落ちる前に溶けるようにして消えた。振り返れば、その花はもともと生えていた位置に、何事もなかったかのように戻っている。

それと同時に、ユユの表情がゆるんだ。

「ギルベルト？ どうしたの？」

眠たげに訊ねるユユに、ギルベルトは安堵のような呆れのような息をつく。

「お前は本当に厄介な奴だな……」

「やっかいって？」

「いい子ってことだよ」

えへへ、とユユはうれしそうにする。リーオが不思議そうにギルベルトを見た。

「帰るぞ」

ギルベルトはユユの手をとって、それから出口が見当たらないことに気がついた。

あっちだよ、とユユが指を差す。

* * *

ギルベルトたちがイルマに呼び出されたのは、それから数日後のことだった。

イルマはいつも通り、革張りの椅子に腰かけて広い机に肘をついている。その対角、部屋の扉のそばには、ヴェーノがたたずんでいた。あいかわらず表情はよく見えない。足元から音もなく、紫色の幻花がにじみ出していた。

ギルベルトが前に立つと、イルマは口を開いた。

「近々、この近辺で国王派との衝突が起こる」

起こるのではなくて起こすのだろう、とギルベルトは内心でつぶやいた。不穏な雰囲気を感じ取ったのか、ユユがギルベルトにかくれるようにしがみつく。

「お前たちも戦いに加わることになる。特にギルベルト。お前はそこで——アサーディールの凶魔の力を示せ」

すでに決まったことのように、イルマは話す。ギルベルトのあずかり知らない、反国王派を統率する人間たちの決定だろう。

ギルベルトはその事実に、ふっと笑う。

「そして、俺が死ねばいい、か？」

リーオとリュビアがはっとしてギルベルトを見た。

今まで殺されていないこと自体、奇跡のようなものだ、とギルベルトは思う。凶魔が人間と約束を結ぶのは、上層部にとっては完全に想定外だったはずだ。ましてやアサーディールは特に制御が難しいとされている悪魔。一人の若造のそばに置いておくには危険すぎる。何事も起きないうちにと、ギルベルトが始末されていてもおかしくなかった。

イルマは顔をしかめる。

「人間きの悪い。別にそんなことは思っていない。ただ——」

その先は聞くまでもなく、ギルベルトにもわかっていた。次に起こる戦闘でアサーディールをうまく操れなければ、好都合だろうと不都合だろうと、敵に殺されて終わり。生き残れば優秀な戦力として数えられる。イルマは、ギルベルトを試そうとしているのだ。

ギルベルトはユユを抱き上げた。これ以上イルマの話聞いていてもむだだからだ。

「すまないが、俺は降りる」

「降りる？」

イルマは意表を突かれたようだった。言葉の意味を量りかねて、首をかしげる。

ギルベルトははっきりと告げた。

「俺は、ユユを戦わせることはしない」

復讐が、かつてギルベルトの生きる理由だった。

しかし今、その憎しみはうそのように薄らいでいる。ギルベルトは、最初からわかっていたのだ。妹を殺した貴族の顔など、もうよく覚えていない。ただほかにどうしようもなかったから、憎しみに身を任せていたのだ。満たされない気持ちを、復讐という目標でごまかしていただけだった。

今のギルベルトには、ユユという、守るべき妹がいる。

「俺は出ていく。伯爵、世話になったな」

茫然としていたイルマの目が一転、すどく光った。

「それは、許されない」

怒気を超え、殺気を含んだ声。

ギルベルトは、イルマの気迫に思わず息を呑む。ユユがギルベルトの腕をぎゅっと握りしめた。

「お前たちを見のがしてきたのは、お前たちの存在が、いずれ国の益になるだろうと思ったからだ」

イルマの視線は刃のようで、心臓を突き刺されるような感覚をおぼえる。

国のため。イルマの行動基準は、いつもグランゼリアという国に利するかどうかだった。革命軍についてのも、長い目で国のためになると思ったかららしい。

「グランゼリアの繁栄のために、悪魔は使われなければならない。お前も同じではなかったのか、ギルベルト・オルディアン？」

びりびりと空気までふるわせる声に、しかしギルベルトは怯えはしない。

大きく息を吸って、イルマよりも大きな声で、断言する。

「俺はもう、同じじゃない」

それからギルベルトは不安そうなユユに向かって笑ってみせた。ユユの手がゆるむ。赤い幻花がわき出して、天井まで舞い上がった。それを確認して、ギルベルトは目を閉じた。

「今だ、ユユ！」

次の瞬間、まばゆい光が部屋を満たした。赤い花びらの一枚一枚が炎となり、閃光を発したのだ。

失明するほどではないが、その光のあまりの強さに、誰も何も見えなくなる。その状況で、ギルベルトはユユを抱えたまま薄目を開け、紫の影がちらちら見える方——ヴェーノへと突進を仕掛ける。

ヴェーノを守る紫の幻花が、ユユからわいたそれと衝突して消えていく。ギルベルトは肩から思い切り、ヴェーノにぶつかった。

すぐ後ろの壁に叩きつけられたヴェーノがくずおれた。ギルベルトはユユを床に下ろす。手探りでヴェーノの胸倉を掴み、冷静さを取り戻される前にみぞおちに拳を突き入れる。手の甲に痛みが走った。

相手が人間一人と悪魔一体なら、悪魔を先に動けなくした方が勝ちである。

「逃げるぞ」

ギルベルトは再びユユを抱えて、扉を開けた。

光はすでに消えている。面々の視界が徐々に回復してきている頃だろう。ギルベルトがそう思った瞬間、我に返ったイルマが、俊敏な動きで机を飛び越えた。ギルベルトの予想以上に素早い動作だった。ユユを抱えていては追いつかれる。悪魔をやられてはまずいのは、ギルベルトの側も同じだ。

そのとき、ぱっと青い花びらがあらわれて、イルマの行く手を阻んだ。リュビアの幻花である。

「お前……」

イルマは失望した表情でリーオを見た。青い幻花に隔てられた向こう側で、その目が細められる。

「ヴェーノ、私を巻き込んでいい。全力であの馬鹿と悪魔を止めろ」

イルマに呼ばれて、ヴェーノが苦しげに体を起こした。長い前髪のすき間から、苦痛に満ちた瞳が見えた。

「ヴェーノ、どうしてそんなに……」

ユユが訊ね終わるより先に、ヴェーノが片手を勢いよく振り上げた。

濃い紫色が、部屋を埋めつくす。一瞬ののち、そのすべてがギルベルトたちに降りかかった。

「くっ……」

想定以上に、ヴェーノの力は強い。おそらくは経験の差だ。

体じゅうににぶい痛みを感じながら、ギルベルトはユユとともに部屋を飛び出した。ヴェーノは毒を操るという。どんな魔法が使われたのかはわからないが、まだ、動ける。

「ヴェーノ、苦しそうだった……」

腕の中でユユがつぶやく。ギルベルトは笑ってみせた。

「俺が殴ったからな」

「ううん、それだけじゃなくて……」

ユユの言わんとするところは、ギルベルトにもわかっていた。イルマは同族を傷つけるようヴェーノに命じた。いつも何を考えているかわからないが、ヴェーノだって、心のある生き物なのだ。

それでも、ヴェーノを助けに戻るわけにはいかない。かといってどこへ向かえばいいのかも、ギルベルトにはわからなかった。ただ漠然と、誰もいない場所に行きたい、と感じる。誰も戦わなくてすむ場所へ。けれどそんな場所が存在しないことは、グランゼリアで生まれ育ったギルベルトがいちばんよく知っているのだった。

* * *

「リーオ、なんでついてきた」

庭園を抜け、隣の侯爵領へ続く路地を駆ける。とりあえず、フォンテ伯爵領を抜けるべきだと判断したからだ。ユユを背負って走るギルベルトのあとを、リーオとリュビアがついてきている。争いから降りることを、リーオたちには話していなかったというのに。

「僕が、ギルベルトについていきたいと思ったからだ」

リーオは笑って答えた。その笑みがずいぶんと頼もしく思えたので、ギルベルトも口角を上げる。

追っ手の数は増える一方だった。イルマはこの事態をも予想していたのか、邸宅の外に私兵が控えていたのだ。それも悪魔持ちの者がほとんどである。

弱い悪魔といえども、何十という数が集まれば、凶魔にも匹敵する力になる。リュビアとユユが幻花をまき散らして追っ手の魔法を防いではいるが、近いうちに限界が来るのは明らかだった。

ギルベルトは妙な感覚をおぼえた。頭の中で、ぱちぱちと何かが音を立てる。後方で、誰かが倒れる音がした。

「リーオ？」

立ちどまった瞬間、ぐらりと体がかしぐ。世界がぐるぐる回って、立ってられなくなった。ヴェーノの魔法が、今になって効果を発揮しているのだ。

ギルベルトはその場に倒れ込んだ。目の前の景色がゆがんで、何も見えない。ばたばたと足音が近づいてくるのが聞こえたかと思うと、何かで頭を殴られた。衝撃で、一瞬思考が真っ白になる。熱を帯びたすどい痛みが走った。

「ギルベルト！」

なんとか視線を上げると、投げ出されたユユがギルベルトに駆け寄ろうとしていた。しかしたどり着く前に、ユユは吹き飛ばされて地面に叩きつけられる。くすんだ色の幻花が見える。誰かの悪魔の魔法だった。

ユユがさらに攻撃を受け、硬い路地を転がる。

「ユユ！」

ギルベルトは叫ぶ。ユユの方へと伸ばした手に、剣の切っ先が突き立てられた。

「うあ……」

声も出ないほどの痛みに悶絶する。剣が引き抜かれ、真っ赤な血があふれ出した。

ここで死ぬのだろうか、とギルベルトは痛みの裏で考える。自分はまず間違いなく殺されるだろう。ギルベルトは死に、ユユは元の悪魔の姿に戻り、またあの塔に閉じ込められる。

この状況で生き残る道は、ユユだけだった。ユユがその強大な力をふるえば、この数の悪魔とも互角に戦えるだろう。しかしその道はないも同然だと、ギルベルトはすでに悟っていた。ユユは戦い方を知らない。相手への反撃のすべさえ持ち合わせていない。それに何より、ユユを戦わせることはしないと、ギルベルトは決めたのだ。

ギルベルトは苦笑した。ユユのことを、守らなければならない、妹のようだと思った。けれど、結局ユユがいなければ、ギルベルトは何もできないのだ。守られるのはギルベルトの方だった。

ギルベルトがユユの兄ではないように、ユユは、ギルベルトの妹ではない。

「ユユ・アサーディール」

ギルベルトは遠くに倒れたユユに呼びかける。頭上の相手が振り下ろした剣を、なんとかかわした。

それは、意趣返しのようなもの。

大きく息を吸って、ギルベルトは、禁忌の言葉を口にする。

「お前はもう、俺を信じなくていい」

とたん、ユユに変化が起こった。

幻花がユユの周りに次々とあらわれる。それは花びらではなく、鮮やかな大輪だった。そのすべてが、炎へと変化する。ユユの体の輪郭が揺らいで、焰が小さな体を侵食した。

緋色の風が巻き起こる。その中心に、凶魔ユユ・アサーディールが姿をあらわした。家ほどもある巨躯が陽光を受けててらとかがやく。一つ目が開いて、茫然とする私兵たちを映した。

黒い瞳がぎょろりと動いて、ギルベルトをとらえる。化け物の姿をしているのに、ユユが不安そうな表情をしているのが、ギルベルトにはわかった。ギルベルトは笑って、逃げろ、とつぶやく。

「悪魔だ！」

敵の一人が何かを取り出すのが見える。聖花だった。あれを地面に輪状にまくだけで、おりが完成してしまう。いかな凶魔といえども、そこからは脱(ぬ)け出せない。ただ、人間が悪魔の味方をすれば、それを防ぐことは難しくない。

ギルベルトは渾身の力を振りしぼって立ち上がると、聖花をまこうとした兵士に体当たりをくらわせた。紫色の小さな花がばらばらと地面に落ちる。その隙だけで、十分だった。

ユユ・アサーディールの力はすさまじかった。燃えさかる炎で辺りの景色が真っ赤に染まって、空までもが赤く見えた。人間の姿だったときとは比べ物にならない。元の姿に戻ったことで、力の使い方を思い出したのかもしれない。

ギルベルトが起き上がったときには、すべてが終わっていた。

もう敵は誰もいなかった。後方にリーオとリュビアが倒れているのが見えるだけで、ほかには何も残っていない。

「悪い。結局、お前に嫌な思いをさせた」

ギルベルトは立ちつくしている赤い背中に声をかけた。ユユは戦わずに逃げるだろうと、ギルベルトは思っていた。

「ううん、ユユ、嫌じゃなかったよ」

ユユは人間の姿のときと変わらない、幼い声で返事をする。しかしどことなく、その声は悲しげだった。

大きな体を引きずって、ユユはギルベルトの前までやってきた。体を縮こまらせている。元気がない様子だった。

「怪我が痛むのか？」

ギルベルトが訊ねると、ユユは力なく首をふる。ぼたぼたと血なのか体の一部なのかかわからない赤い液体が、地面に飛び散った。

「ねえギルベルト。ユユは、悪魔なんだって」

ユユがぼつりと言うので、ギルベルトは思わず笑ってしまった。

「知ってる」

ユユはなおも悲しそうにつぶやく。

「悪魔は、悪い生き物？」

その言葉の意図を汲(く)み取って、ギルベルトは立ち上がった。傷がない方の手を伸ばして、ユユの体に触れる。その見た目とは裏腹に、体の表面はひんやりとしていた。

一つ目を見上げて、ギルベルトは言う。

「ユユは、人間は悪い生き物だと言われたら、俺を嫌いになるか？」

ユユはぶるぶると首をふった。液体がさきほどよりも遠くまで飛んでいくのが見えた。

「ユユは、ギルベルトが人間かなんて気にしないもん。それに、ギルベルトは悪い人じゃないもん」

ギルベルトはうなずく。

「俺も、同じだ」

ユユは顔をかがやかせた。その体じゅうから炎が流れ出したが、ちっとも熱くはなかった。虹色のきらめきが、消えないまま辺りの景色を彩って踊る。

そのユユを、全身でしあわせを表す子供を、ギルベルトはいとおしいと感じた。しかし同時に、それを伝える上手な言葉を持たない自分にも気がついた。

しばらく迷ったあと、ユユ、と呼びかける。

「これは約束じゃなくて、ただの俺の願いなんだが……」

ギルベルトが口ごもる間も、ユユは静かに待っていた。

「俺と一緒に来てほしい。この先どうなるかはわからない。だが、お前に力を貸してほしいんだ」

悪魔の目がそわそわと動いた。くるくると、巨体の周りを炎が飛び交う。熱を持った沈黙が流れた。

ぱたりと炎の動きが止まる。ユユが三つの口を開いた。

「じゃあ、ユユのお願いも聞いてくれる？」

ギルベルトはうなずく。すると、ユユはギルベルトに向かって手を差し出した。ギルベルトの体ほどもある手だった。

そして、ユユは言った。

「ユユを信じて、ギルベルト！」

「はあ……死ぬかと思った」

リーオは倒れたまま、両腕を広げる。路地のつめたさが心地よかった。

リーオの傷ついた手を、隣で座り込んでいたリュビアが握る。それから、ふっとほほえんだ。

リーオはリュビアの顔を見る。ルーアの顔をした悪魔。白い頬に、血が伝っている。倒れて動けなくなったあと、まずリュビアがひどく殴られた。リーオよりも、リュビアの方が痛いはずだった。

リュビア、と呼びかける。

「ありがとう」

リーオが礼を言うと、リュビアはきょとんとした。

「それは、私に？」

おそろおそろといった様子で、リュビアは自分を指す。その気弱さは、ルーアにはないものだ。ルーアは怖いもの知らずの強気な女の子だったから。

リーオはそんなことを考えた。ずっと考えてきた。そしてふいに、ばからしくなった。

だから笑って、伝える。

「うん。色々感謝してるんだ。本当に、色々」

「急にどうしたの」

「僕も変わらなきゃ、って思ったんだ」

リュビアは目を丸くした。今度は心配するような表情になる。

「大丈夫？」

頭は打ってないよ、とリーオは起き上がる。前方に、ギルベルトとユユの姿が見えた。人間と悪魔のやりとりを眺めながら、つぶやく。

「僕が言うのも変だけどさ、リュビアは優しすぎるよ」

「だって私は、あなたのお姉さんを」

リュビアの手が、リーオの手を握りしめる。温かい手だ、とリーオは思った。それから、リュビアの本来の姿はどんなだったろうと考えたが、思い出せない。そのことに気がつくと、自然と笑みが消えた。

「リュビアは、ルーアじゃないんだ」

そして、ルーアはもういない。

イルマが子供扱いする理由が、リーオには少しわかった気がした。そして、リュビアもたった二年しか生きていないことに思い当たる。

リーオは、自分とよく似た顔を見つめた。

「ねえ、少しずつでいいんだ。リュビアのことを、教えてくれないかな？」

* * *

数年後、グランゼリアは大きな変化を迎えた。人間によるすべての「約束」が効力を失い、人間が悪魔を支配する時代は終わりを告げた。

争いは起こらなかった。それはもはや争いと呼べるものではなく、悪魔によるただ一方的な蹂躪(じゆうりん)だったからだ。

魔境に朝が訪れた。焼け落ちた王城に、悪魔の王が舞い戻る。その隣には、一人の人間の王が寄り添っていた。

約束の国グランゼリア。退廃を終えた魔境には、美しい聖花が花開く。

* * *

ひらひらと花びらが舞う。散り消えた花は二度とあらわれることはない。変化のきざしを見せる魔境の最奥に、悪魔が座り込んでいるのを、青年は見つけた。

「何をしているんだい？」

「花を植えているんだ」

「花？」

青年は悪魔の手元をのぞき込んだ。青年の頭ほどもある大きな指が、器用に細い茎をつまんでいる。

「まだ蓄さえないじゃないか」

「うん、私がまだ生きているから」

悪魔は当たり前だというふうにならずいてみせる。青年は肩をすくめた。

「君が死んだら咲くっていうのかい？ 気の遠くなるような話だなあ」

花園の中央、様々な大輪に埋もれるようにして植えられたその苗は、いかにも頼りなかった。けれど、悪魔は満足そうにほほえむ。

「この花が咲く頃、次の私が、私のことを思い出すよ。私と、この世界と——それから、お前のことも」

千年を生きた悪魔の王の表情は穏やかだった。

青年はおもむろに立ち上がる。

「——それじゃあ、そこに次の僕がいることを願おう」

その視線は、彼にしか見えない出口に向けられていた。

「ここを出ていくのか？」

悪魔が静かに訊ねる。青年はうなずいた。おどろきも悲しみも、もう流れはしなかった。悪魔も青年も、そのときがいつか訪れることを、ずっと前から知っていた。

悪魔と青年は並んで、彼方にある人間の町を眺めた。

「しかし君も、悪魔全部を変えてしまうなんて、思い切ったことを考えるね」

青年が呆れたように言った。最奥にいても、悪魔の王が何をしようとしているのかはわかる。嵐が来る。嵐が、この空間をも巻き込んで世界を変えていく。

「償いだよ。せめてもの」

つぶやいた悪魔はうなだれて、思いつめたように足元の花を見る。

誰への、とは訊かずに、青年は悪魔の体を撫でた。その手は、すでに生者の温度をしていない。青年の体は、もはやこの花園だけのものになっていた。

けれどそれも、もう終わる。花園は花園ではなくなる。それと同時に、青年の体も、最初から幻であったかのように消え去るのだ。

「君は優しいよ。本当に、優しすぎる」

悪魔はうなずいた。悪魔は優しい性分の生き物だったが、それがいつもよい結果につながるとは限らない。それでもなお優しくあらずにはいられないのが、悪魔という生き物だった。そのことを、悪魔自身も、よく理解していた。

別れの時が近い。けれども、胸に去来したさびしさを、青年も悪魔も、口に出すことはしなかった。そんなことは、言葉にするまでもないからだ。

代わりに、青年は希望を口にする。

「約束しよう——アサーディール。花が咲く頃、僕たちはまた一緒にいる、と」

悪魔は力なく笑った。

「王といえども、そんなことまではできないよ」

悪魔の魂は流転し、王は死んでもいずれ再び生まれる。しかし人間が死んだあとどこへ向かうのかは、誰にもわからないのだった。

知っているさ、と青年はほほえむ。

「すべての約束は、何の力も持たない、ただの願いだよ。だから、君も一緒に信じてほしいんだ」

悪魔の体がぼこぼこことあわ立つ。それがよろこびを表していることを、青年はもちろん知っている。

炎を虹色にゆらめき立たせながら、悪魔が青年を見つめる。つめたく吹きすさぶ風で、花びらが空に舞い上がる。

そうして約束は交わされた。

「また会おう。いつか、優しい花が咲くまでに」